

人生と
着眼點

内田鐵洲著



始



館成興京東

504

特 202
589



内田鐵洲著

生と著眼點

東京興成館



序

悟る眼と著手の勇は人生の勝敗を決する鐵則である。如何に學識智謀があつても、總て物事を雲烟過眼視して仕舞へば結局死んだ學識智謀に過ぎない。我が國民の中には所謂東洋風の豪傑を氣取り、何ごとも大まかに見たがるものが多い、そして細心綿密と、云ふことを小人物の代名詞位に考へたがる様だが、自分の無能をかくす爲の肩書き者流が巾を利かした時代ならいざ知らず、日新改革の現代では通用しないものだ。

「人生は練習なしに本舞臺を演じなければならぬ劇場だ」と云つた人があるが、我々の行動にはやり直すと云ふことは許されない。一の失敗でも取つて以て前進への手がかりにする程の氣魄と用意周到さがあつて始めて成功への扉を開くことが出来る。如何なる大きな扉も小さい蝶つがひによつて左右に開かれるや

四
 うに、我々の小さい智能を以て人生の歴史に偉大なる遺物を残すには、著眼の機微をつかみ、勇敢に遂行する熱意さへあれば誰にも出来ることだ。本書は古今の偉人傑士が如何に著眼の機微を捉へたかと云ふことを實例によつて示したもので、讀者諸君はこれによつて必らず人生に對する心構へを體得し、大発見、大飛躍へのヒントを握られるものと信ずる。

昭和十四年初夏

著 者 識

目 次

頼みは只だ我身一つ……………二
 仕事する以上精根を打込む……………三
 壯志を貫徹す……………四
 相手に依つて策を立つ……………七
 鐵は熱し切つた時に打て……………八
 頭を働かせ……………二二
 この氣慨……………三三
 斬るべき透間もない……………三五
 捨てたら泣く……………三七
 考へ方が違ふ……………三〇
 履歴書は要らぬ……………三二
 不況に乗じて……………三四
 漫談家業の創始……………三七

目 次

五

芭蕉翁の發見.....	六
先づ考へよ.....	三九
奇抜な思ひ付き.....	四〇
塵芥一つ見逃がさない.....	四一
心氣一轉した動機.....	四二
悟る眼と著手の勇.....	四三
正直の餘得.....	四四
棄てる金と生かす金.....	四五
金よりも強い力.....	四六
一寸した思ひつきもよく見つめよ.....	四七
綿密な觀察.....	四八
目立たない仕事.....	四九
氣魄.....	五〇
勇氣の要る仕事.....	五一
難事業に著眼.....	五二
裸一貫から眞珠王.....	五三

人間の生贖.....	六
空手空拳.....	七
自己發見.....	七
世に棄つべきものなし.....	七
大金はねらはない.....	七
熟慮斷行.....	七
運命の開拓.....	八
天下のこと皆この通りぞ.....	八
三十年後の計劃.....	八
武士の遊藝は肩に出來た腫物の如し.....	八
精神力の飛躍.....	九
禍を轉じて福にする.....	九
誤魔化しでは駄目.....	九
後世への最大遺物.....	九
英雄の眼.....	一〇
馬丁に目をつけた兆民.....	一〇

些細な事を見ても将来がわかる……………一〇二

集注する力……………一〇四

金儲けのコツ……………一〇五

著眼の機微……………一〇七

躍動する著眼の妙……………一〇九

一枚の葉書……………一一〇

四時間の利用如何……………一一三

知識を求むる心をつかむ……………一二四

私心を藏せず……………一二三

國家的事業に著眼……………一二四

常に第一線に立つ……………一二六

神影流の極意……………一二三

風流は其處ぞ……………一二六

俳歌と著眼點……………一二八

打てば響く弾力……………一四〇

均一商店の創始……………一四四

流石の光圀も一本參る……………一四六

お前たちの知つたことかい……………一四八

皮肉と諷刺……………一四九

一圓の金が百年で一萬圓……………一五三

こゝが腕の見せ處……………一五四

自己推薦……………一六〇

馬鹿につける藥……………一六一

漫談の大御所……………一六二

非常時に何のことだ……………一六四

温情主義……………一六五

成功の側杖……………一六六

好機はゴロ／＼してゐる……………一六八

四角い重箱に圓い杓子……………一七一

實情をありまゝ公表……………一七三

不便さに著眼……………一七七

表裏なき活動……………一七九

百姓の冷笑……………一八一

無報酬で八年間……………一八四

第一人者たるの心掛……………一八六

一粒飲めば腹の減らぬ薬……………一八八

たつた一滴……………一九一

近道……………一九三

損して得する……………一九六

虚心坦懐……………一九九

一寸した注意で大發明……………二〇一

この機轉……………二〇三

人を率ゐる道……………二〇五

朝鮮の雲母王……………二〇九

横田千之助と星亨……………二一一

ジョン・ワナメーカー……………二二三

岩崎彌太郎の少年時代……………二二五

安田翁の偉さ……………二二五

頼みは只だ我身一つ

福澤桃介は我が國財界有数の成功者で、晩年は豪放磊落、思ひのまゝの生活をして居つた人であるが、其の壯年時代は決して、順調ではなかつた。彼は壯年時代肺を病んで入院せねばならなかつた。然かも當時氏は貧乏で、治療費にも困窮し、しばしば知人や親戚に頼んで見たが病氣が病氣のこととて、誰も對手にさへしてくれなかつた。彼は世相人情の輕薄さをしみじみ感じ、死生低迷の間に、豁然として大悟したことは「あゝこの世に我身以外に頼りになるものはない」と云ふ一語であつた。

「よし、此の信念を以て病に勝ち、人に勝ち、世を征服しよう」と勇躍一番、蹶然と起ち、爾來健康の恢復と俱に、有ゆる艱難辛苦を蹴破つて奮闘した結果、終に後年の大成功を克ち得たのである。

頼みは只だ我身一つ

彼は「非常に放膽の様に見えて、其の實頗る細心謙抑であつた。料理屋へ行くにも玄關まで自動車を乗り付くべからず、餘計な祝儀がかゝるから」と誠め、又銀ぶらをする時も「澤山金を持つてゐると餘計な買ひ物をするから、なるべく財布は持たぬがよい」と云ふ様な所があつた。大抵の人は、一度苦境から脱すると、直ぐ放漫になり易いものだが、福澤氏は一度「こうだ」と著眼したものは、最後まで、徹底的に守つて行くと言ふ意志があつた。

仕事する以上精根を打込む

或る裁判官が自分の家の板塀を造らうと思つて、材料はこちらで持つから、手間賃だけ三圓で拵へて貰ひたいと廣告を出した。所がなか／＼来る大工は居ない。たつた一人、私が引受けませうと云つて來た。

「荒削りでざつとで宜しい。三圓しか出さぬのだから、その積りで……」

「宜しう御座います」

と承知して仕事に取りかゝつたのを見ると、如何にも叮嚀に念入りに綺麗に削つてゐる。

「荒削りでいゝんだよ、三圓の日常なのだから」

「はい承知しました」

裁判官は役所に行つて、さて歸つて見ると板塀はちやんと出来上つて居た。大變立派なものだつたので或ひは手間賃の値上げを要求されるのぢやないかと思つて、先手を打ち、

「どうも念を入れ過ぎたなあ、こんなに叮嚀にして呉れとは頼まなかつた筈なのに」

「叮嚀にしては悪かつたんですか」

「別に悪いと云ふわけぢやないが、何しろ手間賃を三圓しか仕拂はないから氣

仕事する以上精根を打込む

の毒だよ」

「はい結構で御座います」

「それぢや手間損になりはせぬか」

「損は損かも知れませんが、引受けた以上、手間賃が安いからと云つて、仕事を粗末にすると、手間賃を損した上に、更に自分の良心を損します。大工として仕事をやる以上仕事に精根を打ち込んで、自分で「なるほどよく出来た」と私の氣が済む様にせねば良心が許しません。」

と答へて約束の三圓を頂いて喜んで歸つて行つた。裁判官はいゝ心掛けの大工だと感心し、その後裁判所の新築の時、最も信用のある大工として此の大工を推薦し、その心掛けに酬ひたのであつた。

壯志を貫徹す

新井白石は幼にして聰慧明敏、夙に大志を抱き、平生字を習ふ場合も「天下第一」の三字を大書し稍々長じては「大丈夫生きて封侯たらずんば、死して閻魔王たるべし」と壯語して居た。

白石の幼少時代には特に頼るべき人、頼るべき何物もなかつた。彼の父正濟（土屋民部少輔利直の士新井與治右衛門正濟）は小身、小祿の士で、其の地位、その富はもとより頼りにならなかつた。殊に主人の利直が死んでその子頼直の代になると、父は永のお暇となり、白石は「他家へ仕へること罷り成らぬ」との嚴命を受けた。斯くて白石は年二十二歳の頃完くの孤立無援の立場に置かれたが、白石の雄志は少しも變らなかつた。

獨逸の諺に「美果は永く路傍に存せず」と云ふことがある。美味ある果物なら忽ち人に發見され採取されると云ふ意味で、才藝の優れた士は、何時までも市井に置かれるものでない。白石は天賦の穎才に加へて苦學力行した爲、儕

壯志を貫徹す

輩中の第一人者として早くも人目についてゐたので白石を養子にと懇望した富豪が二人もあつた。その一人は有名な大阪の豪商河村隨軒で、隨軒は自分の子が白石の學友なるを頼りに「孫娘の婿養子として來て呉れぬか」と申込み多くの好條件を持ちかけたのであつた。諺に「飢たる者は食を選ばず」と云ふ通り普通の者なら一も二もなく悦んで應じたであらう。當時の白石は誠に貧窮のドン底にあつた。しかし彼はきつぱりこの申出を斷つたのである。何故斷つたか、今の時代の所謂伶俐者の眼には如何にも愚かなやり方である。然し白石には、人を恃み、富を恃むことは結局他人の奴隸となることである。他人によつて功をなすは名譽でも何でもない。寧ろ男子の面目を損んずるものだと信じて居たのである。

斯くて白石は貧困窮乏と戦ひつゝ、何人にも頼らず、何物をも頼みとせず、自力を以て自分を築き上げ、後には徳川六代將軍家宣公に重用され天下の樞機に參じ、其の壯志を貫徹したのであつた。

相手に依つて策を立つ

上杉謙信と武田信玄が對立し合つて輸贏を争ふこと十三年、不識庵の豪快敢爲と、機山の神算鬼謀とは、後世永く我が國民の語り草となつてゐるが、それは互に敵を知ると云ふことであつた。或る時信玄の鬼謀神算を恐れた北條・今川等の南方の諸將が信玄を困らす目的で山國で鹽のない甲州へ、鹽の輸送を禁止したので、武田勢は糧食の上から非常に苦境に陥つた。これを傳へ聞いた謙信は、早速鹽を送つてやつた。又或る時謙信が甲州へ攻め入らうと思ひ、諸將を會して軍事會議を開き、謀を練つたことがあつた。謙信は、諸將の説を、上策、中策、下策に分け、其の最も下なる策によつて、軍を進めることに決心した。諸將は、いぶかつて

相手に依つて策を立つ

「何故、上策を用ひられずや」

と反問した。其の時謙信は、

「信玄は神算鬼謀の將なり、上策は既に信玄の見破る所ならん、戦ひは相手に

よつて策を立つべきなり」

と、云つて、所信に向つて敢行した。果して、上策の間道へは、信玄獨得の

戦術が施されてあつた。その時のことである、鬼謀の裏をかいだ謙信の策戦、

即ち「鞭聲肅々夜川を渡る。曉に見る千兵の大牙を擁するを云々」の詩とな

つてゐる。策は策によつて立つものにあらず、人に依つて策を立て始めて躍動

するものである。

鐵は熱し切つた時に打て

人間の成功、不成功は、すべて機會をうまく利用するか否かにある。機會に

乗ずれば多くの勞を費さないで容易に效を奏することが出来る。

上杉謙信は幼名を猿松と云つた。八歳の時、繼母の讒言にかゝつて越後橡原

の淨源寺に逐ひやられた。そこに留ること十年、年十八の時、父爲景が越中で

討死したので、その弔合戦を思ひ立ち、平三景虎と名乗つて兵を橡原城に擧

げた。

敵は直ちに討手を差し向けたが、景虎の爲に散々撃ち破られたので、敵將は

自ら兵を率ゐて來り攻めた。景虎は再びこれを蠣崎の下濱に於て撃ち破つたの

で敵將は、府内を指して引き退いた。

その時景虎は米山の東坂本に居たが諸將は、「只今こそ追撃に絶好の機會で御

座る」と追撃をすゝめたが、景虎は

「睡くなつた。少し休んでから追撃しよう」

とらたゝねして仕舞つた、諸將は、

鐵は熱し切つた時に打て

「あたら好機を逸するよな」

と口惜がつたが、景虎はなかく起き上らなかつた、少時して、つと起ち上り、

「敵の兵は、今頃、山を三分の一程向ふへ越えたであらうぞ、いざ追撃致せ」

と馬に乗り法螺貝を吹き立て、龜破坂から落しかけて、大勝利を博した。

人々は、彼の着眼點の凡ならざるに驚歎して曰つた。

「敵が逃ぐるを撃つべきに、空眠りをされたのは、山を追ひ登つて敵を笠に受

けたのでは味方の不利なりと悟り、はやる將兵の氣を押さへ、敵が下り坂にな

つた時追撃しようとの計略であつた。御年わづかに十八歳ながら、あつばれ名

將の器ぞ」

と、今まで年少と侮つて居た老將連まで景虎に忠誠を誓つたのであつた。

頭を働かせ

或る所に一人の男があつた。長い間殿様に使へお庭の掃除などをしてゐたが年をとつて體がひどく衰弱して來たので、殿様は哀れに思はれ、

「家へ歸つて休息致せ」

斯う云つて、一頭の死んだ駱駝を與へられた。男は、それを車に積んで家に歸り、皮を剥ぎにかゝつたが、刃物がよくきれないで、なかく、捗らない。不圖氣がつくと、二階に砥石があつて、刃物を砥ぎに二階へ上つたり下りたりして、すつかり草臥れて仕舞つた。

「あゝ草臥れた、これではやり切れない。何とか便法はないか知ら」

と考へた揚句、繩で駱駝を二階へ吊り上げ、

「これで上り下りの手数がかゝらぬわい」

頭を働かせ

と得意の體であつた。それを見た人々は

「軽い砥石を下さないで、重い駱駝を上げるとは、あの男の頭は餘程どうかしてゐるね」

と輕蔑した。諺に「日が永ければとて事業を爲し得るに非らず、頭のはたらきによつて爲し得るなり」と云つてゐるが、吾々の着眼點はどこかと云ふことに、頭をはたらかさねば、この愚かな男の様な愚を繰りかへすことにならう。

この氣慨

男子は氣慨がなくてはならぬ。韓退之が「首を俛し、耳を垂れ、尾を搖かして、憐みを乞ふは、我が志に非ず」と云つた通り男子たるものは、如何に貧窮しても、毅然たる心構へが必要である。

一代の豪商大倉喜八郎は、身を一商店の小僧から起し、奮闘努力遂に男爵

の榮譽を得るに至つた成功者であるが、男の一生は、意氣と迫力を以て終始したのであつた。

丁度男が上野山下に乾魚屋を開いてゐた頃であつた。當時東國に饑饉があつて、爲に江戸の細民中にも飢餓に瀕する者が續出した。當局の方でも、棄て置けず、これが救済策として、市中の各所に役人を派し、粥の料を給與した、これを「お救ひ米」と云ひ、男の住んでゐた上野摩利支天横町の住民一同も、町名入りの旗を押し立て、「お救ひ米」にありつかうと、大運動を起すことになつてゐた。

「おい鶴さん、出かけないかね」

若い者の一人が誘ひに來た。鶴さんとは男の前名である。男は若者に向つて云つた。

「お救ひ米貰ひにだつて? ……乞食の仲間入りは御免だ」

この挨拶は烈し過ぎたけれど、腹は空つても江戸つ子の氣魄である。しかし

若者等はぐつと来た。

「乞食とは何だ」

斯くて鐵拳の雨を降らさうとした時家主の清造爺さんが飛んで来て一同を押し宥め、男に向つて

「鶴さん、御前も御前だ。お救ひ米に預からないと云ふなら、多分、貯へがあるのだらう。町内の若い衆への御挨拶に何か、出しなさい、そして今日の所は圓く收めなさい」

と要求した。男は言下に

「宜しい」

と答へ、店にあつた乾魚を、残らず提供して、飄然と横濱へ去つたのであつた。彼は横濱に於て再び、日傭ひ人夫から、出發して、あの大業をなすに致つたのである。

斬るべき透間もない

徳川三代將軍家光、曾て柳生但馬守宗矩と共に觀世太夫の猿樂を御覽になつたことがあつた。その時、宗矩に向つて

「觀世の所作を見て、若しも彼の心に透間があつて、此處はいかんと云ふ所があつたら、余に申せ」

と云はれた。宗矩は畏まつて、ぢつと見物して居たが、やがて其の技が終るや家光は

「如何に但馬、透間はなかつたか」

と問はれた。宗矩は、

「始めから氣を付けて、見物致して、御座いますすが、少しも斬るべき透間と云つては御座いませんでした。唯だ舞ひ中、大臣柱の方で、隅を取る時、少し透

間があつた様に存じます。あの時斬れば斬られませうか」

と答へた。一方觀世太夫は樂屋に入つて

「今日の見物の中に、一人ぢつと我が所作を見詰めて居る人があつたが、あれは何物だらう」

と問ふた。座の者が、

「あれこそ、柳生但馬守様で御座います」

「道理でこそ、初めから我が所作を目も放たず見詰めて居られたが、舞の中、隅を取る時少し氣を抜いた所で、忽ち莞爾と笑はれた。ハテ心得ぬことよと思つたが、扱ては、あれが劍道の達人柳生殿で御座つたか」

と語つた。家光後に此の事を聞いて更に感悦せられたと云ふ。柳生程の名人が斬るべき透間のない程、藝道に實が入つて居たのである。一般觀衆の大喝采を博するのは當然の話である。

捨てたら泣く

金原銀行の創立者、金原明善翁と云へば有名な静岡の治水工事をやつた功勞者で、實業界に於いても相當成功した人である。その金原翁は旅行をされる時、お定りの如く汽車辨當を食べて居た。そしてその辨當の食べ残りを必らず風呂敷に包み、それから土瓶も綺麗に拭いて、矢張り風呂敷に包んで鞆の中に入れて持つて歸られた。御飯を一粒も残さず綺麗に食べられることもあつたが箱だけにはちやんと持つて歸られた。それを隨行して行く若い連中が、非常に氣まひ悪く思ひ、

「どうもうちの銀行の頭取が汽車の中で辨當を食つて、その残りを風呂敷に包んだり、土瓶を鞆の中に入れるのを見ると、氣まひ悪くて仕様がな」
と言つて居た。金原翁はそのことを聞き、たゞ

捨てたら泣く

「ア、そうか」

と云つたさきりだつたが、或る時そんなことを云つた者を呼び出して、

「君、お氣の毒だが今日限り、暇をあげます」

と言つた所、その人は吃驚して呆然自失の態であつた。翁はそれを見て

「どうだ、私が辭めてくれと云つたが、君はまだ自分では働ける積りなのに、大變残念に思はないか」

「その通りで御座います。私は何も悪いことをした覚えもありませんし、又働くことも人後に落ちない積りで御座いましたのに、……」

「君は自分では用に立つと思ふのか」

「私はまだ年も若いし、御用に立つと思ひます」

「そうだらう。それが當然だ。私が何時も汽車の中で辨當を食べてその残りや土瓶を持ち歸るのを、他の人が見るとケチな奴だと笑ふさうだが、あの辨當の

御飯なり、あの折箱なり、土瓶なりを、汽車の中で捨て、仕舞つたら、あれ達が残念で泣くだらう。「まだ俺は御用に立つのに、捨て、仕舞ふとは非道い人だ」と云つて、あの米に靈があり、土瓶に靈があれば残念に思ふのだ。

君と同じことだ。働けるのを辭めると言はれると残念に思ふのだ。前途のあののを捨て、仕舞へば泣くにきまつてゐる。解つたか、それが解れば、必らずしも辭めなくてもよい。」

と言はれた。それからその青年は非常に感奮して、能く働き、金原主義の禮讃者となつて、翁の事業を大いに助けたと云ふことである。金原翁はその持ち歸つた折箱は、ちやんと洗つて乾して取つて置き、土瓶も綺麗にして、集めて置き、園遊會等の時、お辨當を入れたり、土瓶を使つたりしたさうだが、現代の人々も大いに翁に學ぶべきものがあると思ふ。

考へ方が違ふ

セメント王淺野總一郎氏夫人サク子さんは、賢夫人の聞え高い人である。或る時、長い長い廊下に煌々と輝きわたる電燈を見て、執事金森氏を呼び出し、「金森さん、この電燈は、あかる過ぎますね、不経済ではありませんか」と静かにたしなめた。金森執事は頭を低く垂れつゝも、胸中期することあるものゝ如く、

「奥さま、當邸の電燈料金は燈類の關係から最低料金が月額百三十六圓ときめられて居ります。秋から冬にかけては勿論損はございませんが、近頃の様には夜の短い時期には實際の消費料は最低料金の半額にも達しません、これは勿體ないことだと存じまして、あまり必要も御座いませませんが、こうして明るく點火させて居ります」

なる程筋道の立つた辯明である。六七十圓の電力しか使はず百三十六圓も支拂ひをするとは、勿體なさ過ぎると云はねばならぬ。普通のものだと、「なるほどそうかね。それぢやなるべく明るくした方がよからう」位で見過ごす所だが、流石に淺野邸の主宰者サク子夫人は見過ごさなかつた。

「金森さん、それは少し考へ方が違つてやしませんかしら、なるほど毎月六七十圓のお金を無駄に拂ふと云ふことは不経済と云へば不経済ですが、さうかと云つて必要もないのに貴重なものを無駄に使ひ捨てると云ふことはどんなものでせう。あなたの考へは、淺野を本位とすれば當然かも知れませんが、お國を中心にして考へ直すと金森さんの考へ方は間違つてゐるやうに思ひますが、どんなものでせう。私はいつもお國の經濟と個人の經濟を一致させたいと考へて、無い智慧を絞つて居るんですから、あなたも一つその積りで居て頂きたいのですが」

何と高い見識ではないか、大は小なり、小は小なり、吾々の經濟生活を國家の經濟に合致する様に心掛けてこそ、國家の繁盛と共に愈々發展する私經濟を作り得るのである。日本國民が一日に一人一粒の米粒を節約したとしても全國では一日二石七斗の米が蓄積出來、煙草を飲んでゐる者が、皆一日にバット一個（八錢）を節約するとせば、一ケ年三億圓の蓄積が出来るのである。

履歷書は要らぬ

自動車王ヘンリー・フォードの會社に或る時二人の青年が同時に備ひ入れられた。一人は大學出のバリツとした青年で、今一人はなんの學歴もない田舎出の若者であつたが、その翌日から二人とも同じ工場で、見習職工として働く様命じられた。

大學出の青年は 不満で耐へられなかつた。彼は早速社長フォードの處へ出

かけて行つて、

「私は假りにも最高學府を出て來たものです。それが何の學識もない者と一緒になされて、同じ仕事をさせられるといふことは、まことに心外でなりません。これは何かの間違ひではありませんか？」

と憤然として云つた。

靜かに聞いて居たフォードは微笑し乍ら答へた。

「私は君の履歷を備つた覚えはない、君の腕を備つたのだ。君の腕がどれだけ優れてゐるか、これは君の仕事を見た上でないと見當がつかぬ。わざと最下級の仕事から始めて貰つたまでだ。腕に自信があるならば、仕事の上で示して呉れ給へ、そしたら、どんなにでも上の仕事をして貰ふことにしようぢやないか」

青年は一言も返す言葉がなかつた。學識を鼻にかけ、理窟ばかりこねて居たこの青年は、自然仕事に興味がなく、間もなく會社を止めて仕舞つた。一方田

舎出の若者は、わき目もふらず眞面目に働き続けた結果、数年の後には、その工場の工場長とまで出世したのであつた。

仕事をする上には肩書とか履歴なんか要らないと喝破したフォードの目は流石に尊敬に價するものである。

不況に乗じて

山本實彦氏が雑誌「改造」を創刊してから約五年、彼の不眠不休の努力は漸く酬ひられて、雑誌の賣行さも次第に増加し、改造社の基礎が愈々固まつたと世間にも認められた頃、丁度あの關東大震災に遇つた。改造社はそのまゝ潰れるか或ひは捲土重來を計つて進むかの重大岐路に立つたのである。

資産と云ふべき社屋機械を始め八十萬冊の書籍、竝に紙型等は灰になつて仕舞ひ、借金だけは残ると云ふ惨めな有様に流石剛愎な山本氏も、完く頭痛鉢巻

の態で、夜も安々と眠れなかつた。

しかし窮すれば通ずるで彼も何とか、この苦境を切り抜け、多くの社員を路頭に迷はしめない覺悟をした。そして、沈み切つた不景氣の世間を驚倒させるやうな大出版をしようと決心したのである。

さて何を出版すべきか？ 彼は沈思黙想の結果、目を着けたのは、我が國の新聞紙の讀者層を調査することであつた。そしてその讀者層の一割を讀者にする様な出版をする計劃を立てたのである。そうするには、どうしたらよいか、いろ／＼議論をしたり研究したりした擧句、彼は先づ文學ものが最も大衆性のあるのを見て取り、現代日本文學全集を出すことに決したのであつた。

次に其の値段はいくらにしたらよいかを研究した。當時讀者大衆の懐は決して温かなものではなかつた。しかし讀書慾に燃えさかつて居た時である。ただあまりに書籍が高いので、それを買ひあぐんでゐた。だから彼は、現代日本

文學全集の値段も、一圓二十錢とか一圓五十錢とか云ふ社員の進言を却けて、一圓と云ふ思ひ切つた値段をつけたのである。當時は東京市内の自動車賃でさへ一圓五十錢だとか二圓だとか云つた時代だから、一圓で、約三百頁の菊判の本が買へると云ふことは、一般大衆に大變安いと云ふ感じを與へ、非常な好成績を示した。かくて、これによつて改造社が儲かつただけでも七八十萬圓と云はれたのである。

それと同時に、改造社の成功に、目を覺まされた他の大出版店は續々と圓本を始め、お蔭で、文士、著者の連中は、大變な景氣で、中には、住宅が出来たり、洋行費が出来たりしたのもめづらしくなつた。とにかく山本氏は日本の出版界に一新紀元を開いた人と云ふべきであらう。

漫談家業の創始

東京に於ては大匠の名は知らなくても、漫談家大辻司郎を知らない者はない。彼は兜町の株屋の伴として、北海道は江差で生れ、株屋の小僧から映畫説明者になつたが、一時は辯護士にならうと思つて法律を勉強したこともある。うだが、若し間違つて辯護士になつて居たら、凡そナンセンスな辯護士が出来上つてゐたらうと思はれる。彼が映畫説明者から轉向して漫談と云ふものをオツ始めた時には、同僚からは蔑視され、世間からは薄馬鹿扱ひにされたものであつた。しかし彼は厭まずたゆまず精進を續け、以來誰の世話にならなし、それこそ自力更生、時代の力もあつたらうが、遂に我國漫談界の基礎を築いたのである。彼はとにかく先覺者の名を冠せしめていゝ功勞者である。彼が漫談を始めてから十五年、トン／＼拍子にのし上つて今では、講談落語

などよりも大辻司郎の漫談と云はれる位有名にはなつたが、其の取材には今日尚ほ彼は足を棒にしてかけずり廻つてゐる、時々新宿の告知板などに見入り、時には焼鳥屋、おでんやの屋臺で、おいしくもない焼鳥やおでんを食べ乍ら一般大衆の氣持をつかむに苦心してゐるのである。

芭蕉翁の發見

よく見れば薺花咲く垣根かな

これは俳聖芭蕉翁四十四歳の時の句である。生れてから四十四年も経つて始めて薺の花を發見して、驚異の目を見張つた芭蕉の氣持を考へて見れば誠に意味深重のところがある。

人の目にもとまらぬ雜草の中に薺が、何の異彩もなく、平凡な姿と色とをつましく装つてゐる。更によく見れば、小さい白い花が葉の間にちよこん

と咲いてゐる。こんな草にもかうした花を持つてゐるか、何と云ふ天地の玄妙なことよと感激して口の端に上つたのがこの一句だとしたら、芭蕉の澄みきつた心の眼の光りが、如何に輝いてゐたか想像されるではないか、世のこと總てこの「よく見れば」でなければならぬ。日常茶飯事のことでも「よく見れば」そこには何ものか、吾々に教へる偉大な意義を發見することが出来るであらう。

先づ考へよ

一代の名僧峨山禪師が十八歳の時の話である。美濃の正眼寺と云ふ寺に修行に行く時、間もなく炊事係を命じられた。

全く慣れない仕事ではあるし、大勢の僧たちの賄ひを一人で受け持つのであるから、その忙しさと云つたら例へようもなかつた。そこで朝は他の僧達より

一時間も早く起き、夜は遅くまで庫裏で働き続けた。それでも尚ほ仕事に追はれ通して寸刻の隙もなく、禪の修行など思ひもよらなかつた。禪師は若いだけに内心の不平をどうすることも出来なかつた。すると或る日のこと、先輩の一人が庫裏の障子をあけて顔を出し、

「どうぢや、忙しいかい」

と言つた。少しむかつ腹を立て、居る時だつたので、

「忙しくつて、やり切れません」

と振り向きもせず答へると、先輩は、

「お若いのう。大分無駄をしてござる」

と言つて立ち去つた。この一言は禪師の肝に銘じた。

その翌日から、自分のやつて居ることに氣をつけて見ると、或る程無駄がある。これではいかん、とそれ以後はつとめて無駄を省くやうに心掛けて見ると

その日からはやゝ早目に仕事が始まり、一同と共に本堂で、ちよつとの間ではあつたが坐禪する餘暇が得られた。

次の日も、一層注意して無駄を省いた所前日の倍程の時間が出来た。そうして日を重ねるにつれて次第に餘暇が多くなり、仕舞ひに一日の約半分は他の僧と共に修行する時間が得られたのである。

「世間の人が、やれ多忙だ、多忙だと云ふのは、大てい半分は無駄に多忙の思ひをして居るものぢや、なんでも無駄をしない様に心掛ければ、倍の仕事が出来来る筈ぢや」

と峨山禪師がよく人を諭されたのは、若い頃の自分の體験によつて得られた尊い經驗からであつた。吾々は「無駄を省く」と云ふ點に着眼して、自分の周圍を見れば、現在の倍の仕事をする事が決して六つかしいことではないのである。

奇抜な思ひ付き

萬年筆が我が國に流行したのは、日露戦争の頃で、なか／＼便利なものだから非常によく賣れた。しかし當時は皆舶來品だったので値段は相當高く七、八圓から十圓迄した。

伊藤信雄氏は、その頃早稻田大學を出たばかりの書生上りの青年であつたが「何か奇抜なものを發見しなければ、金は儲からぬものだ」と考へ、この萬年筆を日本で安く製作することに着眼した。そして淺草千束町に工場を設けた、工場と云つても間口一間半位の土間で、日本で始めての萬年筆を無經驗な氏がやらうと云ふのだから完く無謀な企てであつたが、いろ／＼工夫して見本を作つて見たら、思ひの外上出来だつたので伊藤氏は喜んで、「よし、これなら何とか金を工面して大仕掛けにやらう」

と金策に出かけた。ところがこう云ふ突飛な仕事に金を出す人はなかつた。「萬年筆など毛唐が使ふもので日本人が使ふものではない。作り出した所で賣れる筈はない」

金持ちの親戚の家でもなか／＼貸してくれない。何とかしてこの仕事は目的を達せねばならないと堅い決心をもつた伊藤氏は、仕方なく自分の持つてゐた家財道具を始め妻君の嫁入りの衣類まで賣り拂つて漸く四五百圓の金をこしらへ、それで細工用の機械や材料などを買つて製造したが、どうしても舶來品の様な上等なものは出来ず、不細工なものばかりだつた。それでは、どうしても賣れる見込みはない。資金は日を追つて減つて行く、遂には、米櫃の米がなくなり、御用聞きは皆足を向けなくなる程、貧乏した。債鬼は入りかはり立ちかはり來ると云ふ有様で、誠に慘憺たるものであつた。友人連は「そんな突飛な仕事をするより勤め人になれ」と勧める。流石の伊藤氏も完く途方にくれたの

である。

しかし彼は決して、志をまげず、残りの自分の全財産を賣り拂つて二百なにかしかの金を得、再び工場に立てこもつて製造を始めた。そしていろ／＼苦心の結果作つたのは、漸く酬ひられて相當いゝものが出来た、問屋筋も

「これなら舶來品と變りはない」

とほめてくれ、どん／＼注文してくれた。時は丁度明治四十三年の頃で世間も好景氣に向ひ、今まで、腰に矢立てと云ふ墨と筆の道具を挟んで居た行商人まで萬年筆を利用する様になり、伊藤氏の事業は日一日と發展し、今や巨萬の富を造つて堂々たる製造工場を三ヶ所も持つ様になつた。スワン萬年筆會社が即ちこれである。

塵芥一つ見逃がさない

日清戦争前に支那の北洋艦隊が我が國に來訪して、長崎や横濱其の他各地に於て盛んに示威運動をしたことがあつた。當時の日本海軍は誠に貧弱なもので、彼の定遠、鎮遠など大戦艦は我が國民に相當威壓を感じさせた。

ところが東郷さんは度々烏打帽子か何か被つて平服で、定遠、鎮遠を見物人に混つて見に行つた。ある時、東郷さんが定遠を見物してゐると支那の一水兵が洗濯したズボンを大砲の砲身に引掛けて乾して居るのを見て、莞爾と笑つて「大丈夫だ、支那の艦隊は何時でも叩き潰すことが出来る」と言はれた。

東郷さんは支那兵の精神教育のなつて居ないのを見てとられたのである。東郷さんは終生精神主義を遵奉された方で、精神のなつて居ない者は如何に數や

量を集めても何の恐れる所もないと看破されたわけで、支那の大艦隊もかくて無智な民衆は威嚇したであらうが、具眼の實際家は却つて弱點をつかまれた形である。果然日清の役が始まるや東郷さんは終始積極的に出て支那の大艦隊を壓迫し、終局の大捷を博したのであつた。

心氣一轉した動機

「寶丹」の元祖守田治兵衛氏が若い頃散々事業に失敗し、全く無一物になつて、東京にも居たゝまらず唯一人悄然として旅に出た時のことである。彼は旅に出たと云ふよりは寧ろ、生きて居る氣力もなくなり死に場合を探しに出たと云つたがよい位であつた。何の希望もなく、暗い心を抱いて、甲州街道を下り、甲府の或る安宿に泊つた。そして疲れた身體を薄い蒲團の上に横たへ、下圖枕下の屏風を見ると、次の様な文句が目についた。

「裸にて生れて來たに何不足」

それが然かも金釘流のお粗末な字である。それが妙に當時の守田氏の頭にピンと來るものがあつた。

「裸にて生れて來たに何不足」

「さうだ。俺はもと／＼裸で生れて來たのだ。それが今裸一貫になつたと云つて不平を起したり、狭い量見を起したりするのは飛んでもない間違ひだ。」

と氏は齷然として悟り、急に元氣をとりかへして、再び東京に引かへした。そして此の一句を肝に銘じ奮闘努力した結果、遂に今日の大をなす基礎を築いたのである。

悟る眼と着手の勇

發行部數三百萬と稱せられる雑誌レーデイス・ホーム・ジャーナルの主宰者

心氣一轉した動機

悟る眼と着手の勇

エドワード・ポックは、誰が何と云つても雑誌界に於ける世界第一人物と云つてよい。

彼が今日の大成をした原因は常にその脚下から寶玉を見出すと云ふ主義によるもので、彼が少年時代のことであつた。或る日學校からの歸り道で、一人のイタリヤ人が、果物や野菜の罐詰にはりつけた綺麗なレットルを集めて、それを切抜帳に貼り、子供の玩具として母親達に賣つて居るのを見た。

ポック少年は感じた。

「もつと澤山あつたら、もつと澤山儲かる筈だ、もつと珍らしいレットルを加へたら、もつと高く賣れるに違ひない」と。

世の普通の人は、いろ／＼よいことを思ひ付いても、なか／＼着手しないのでその内に機會を逸して仕舞ふものだが、ポックは直ちに、彼イタリヤ人に交渉して、普通のレットルは一枚一セン、珍らしいものなら一枚三セン、と云ふ

取りきめをして、その日から盛んに空罐を蒐め、盛んに賣りつけた。彼は金持の家の裏に行くと、ゴミ箱の中に珍らしいレットルの空罐が澤山ころがつてゐる事を知つて居たのである。かくて彼は相當の貯金をした。

又或る日のこと、彼はパン屋の前を通つた。フト頭に浮んだことは「此の硝子戸棚が硝子が氣付かれない程、きれいに置いて置いたら、もつと感じがよくなり、道行く人の食慾をそゝり、澤山賣れるに違ひない」と云ふことであつた。ポックは早速パン屋の主人に進言し、その同意を得て毎週火曜日と金曜日の放課後、硝子の掃除に来る、その報酬は一週間五十仙と云ふ事を約束した。

かくてパン屋の硝子は有るか無いかわからぬ程きれいに磨かれた。案の條、パンの賣れ行きは倍加したのであつた。

これ等はポックの着想と着手の一例に過ぎない。彼はこの調子でいつも眼の前に機會を見つける。見つけ次第に手を伸して、我が物にすると云ふことを、

大人になつても繼續したのである。世界一の雑誌王になつたことも決して偶然ではない。

「妨害物は見詰めて居れば段々大きく見える」と云ふことがある。いゝことを思ひついたら早速着手しないと結局引込思案になり遂に何事をもなし得ないこととなるものである。

正直の餘得

明治時代の大教育家として知られてゐる江原素六先生は貧乏士族の子として生れた人である。その頃の貧乏士族は家計を助ける爲に、お箸や爪楊枝をけづつて、賣つて居た。素六先生も十歳の頃から父親の手傳をして、楊枝けづりをしたり、それを賣り歩いたりした。

「楊枝はいりませんか」

と盛場の小間物店へ賣り歩くのであつたが、不思議に素六の持つて行つた楊枝はよく賣れた。小間物店の中には品切れになつても、外の者から買はずに素六が賣りに來るのを待つて居て買ふものすらあつた。

それは決して素六親子の作つた楊枝が特によいとか、廉いからと云ふわけではなかつた。實はその頃の楊枝屋一般の習慣として楊枝を百本づつ束ねるのに人目につく外側には出來のよいのを並べて内側には、わるいのを並べるのが、あたりまへであつたが、素六は、どうもそんな誤魔化しが出来ず、最初から出來のいゝもの、中くらゐのもの、わるいものを、それ／＼別けて束にし、ちやんと買手に明かにして、それ／＼相當の代價をつけた爲、非常に喜ばれたのであつた。そして、値段も云ひ値で賣る様にしてゐたから、商賣のかけ引きもいらないし、時間もかゝらなかつた。外の楊枝屋がまご／＼して居る間に素六はさつさと賣り盡して、歸宅することが出來た。

「あゝ矢張り正直の餘得だ」

と子供心にもつくづく感じた素六は一生を通じて正直を以て、身を立て、偉大なる教育家になつたのである。

棄てる金と生かす金

世界大戦の頃の話である。山本条太郎氏と松野鶴平氏が共同で鑛山をやらうと云ふので採鑛事業を始めたことがある。さて随分金をかけたが一向事業がはかばかしくなく、その上技師長の病氣や何かで松野氏はすつかり厭氣がさして、事業を止めて仕舞ふと思ひ、先づ技師長に會つて、この鑛山は見込みがあるか、どうかを聞いて見た。すると技師長は、

「今後、更に二十萬圓位も投じて、三ケ年もかけたら掘り當てるだらうと思ひます」

と答へた。松野氏は、これから更に二十萬圓も費して、三年もの日數がかゝるとすれば、山本氏と雖も止めると云ふに違ひないと思つた。

當時山本氏は病床にあつたので松野氏は病床を訪れて、技師長の話を繰返し、山本氏の發言を待つて居たが、何の返事もなかつたので、

「さう云ふ譯では馬鹿々々しいから、あまり深みにはまらぬうち、結末をつけようぢやありませんか」

と云つた。すると山本氏は、病床にむつくり起き上つた、

「それは君、何と云ふことだ。君は政治家である。自分も一面政治の方もやつてゐるが、政治家として使つた金は、取戻さうとは思はない。捨てると思つて使ふことだ。けれども實業家として投資したら、必らず其の元金を取戻し、尙ほ相當の利潤を得なければならぬのだ。これが企業家として金を使ふ場合の心得だ。軍人ならば、丁度戦争をすれば必らず勝つだけの決心と實行力がなければ

棄てる金と生かす金

ばならんと同じことだ。

今度やつてゐる採鑛は實業家として始めたことだ。それを政治に使つた金のやうに思ひ切つて棄て、しまはうなどは何と云ふことだ。飽くまで進み給へ、専門家の技師長が、それだけの金と年月をかければ見込みがあると云ふならその言に従ひ給へ、餅は餅屋と云ふ言葉もある。技術の方は技師長に任せ、事務の方は君がやつて最後まで頑張り給へ」

と勵ましたと云ふ。政治家は金を捨てるつもり、實業家は元金と共に、更に利潤を得なければならんと云ふ信條、そして専門のことは専門家を信じ一任すると云ふ大量、流石に目の着け所は偉いものであつた。

金よりも力強い

イタリーのムツソリーニが最初ファツシヨ黨を組織した當座は、非常に貧乏

で、その機關紙ポポロ・イタリヤは、ほんの名前だけの存在で發行部數は僅かに數千に過ぎない憐れなものであつた。

「仕事をやるには矢張り金だ。いくら我々の主張が正しくても、新聞の部數がこんな少くは、とても輿論を動かすことは出来ない。部數をふやすにも金が必要だし、結局金がなくては駄目だ」

と同志は嘆聲を放つた。しかしムツソリーニは敢然として云つた。

「金はなくても部數はふえるぞ」

「どんな方法です」

と聞き返へす同志に對し、

「たゞ一つの方法だ。それは吾々の主張を我々の行動で裏書きすることだ。我の誠心誠意を以て愛國の大運動に終始し、ポポロ・イタリヤの論説を讀まねば全イタリヤの新聞雑誌が編輯出來ないと云ふ所まで頑張るのだ。全世界のイ

ンテリが、ポポロ・イタリヤを讀まねば世界の太勢がわからないと云ふ有様に
なれば、必ず部数はふえるぞ」
と答へた。この意氣と眞劍さが現在尙全イタリヤ・フアシストに、漲つてゐ
るのは勿論である。

一寸した思ひつきもよく見つめよ

自轉車及び自動車のタイヤで世界的に有名なダンロップ・タイヤ工場の經營
者ダンロップ氏が、タイヤ界に入るそも／＼の始めの話である。
或る朝、ダンロップ氏は子息が學校へ行くのを見送つてゐた。田舎の事で子
供等は自轉車に乗つて出かけるのであつたが、當時の自轉車は鐵輪で、乗り心
地が悪く、ガタン／＼と音がした。
今その自轉車に乗らうとする子息を呼び止めて、ダンロップ氏は云つた。

「一寸待て、お父さんがよい事を考へたから」

と、子息の自轉車を持つて來させゴムのホースを持つて來て、それを自轉車
の車輪の周圍に巻きつけ、針金で外れない様に止めた。

「サア乗つてごらん。これなら音はしない。乗り心地もよいぞ」

子息は喜んでそれに乗つて行つた。それをじつと見送つて居たダンロップ氏
は、

「これは面白い商品になるぞ」

凡ゆる自轉車や自動車のタイヤがゴムを使用し出したのは、それから間もな
くであつた。今や、ダンロップ氏は、巨億の富を擁し、世界のタイヤ王として君
臨して居ることは御承知の通りである。

綿密な観察

ガリレオが或る日、ピサの一寺院へ行つて燈籠の揺れるのを見た。その揺れる左右の幅には時によつて大小があるけれども、時間は常に一定して居るので何か同じ幅を左右に揺れる振子を使へば、時の遅速を測ることが出来ると思ひついた。時に年十八歳であつたが爾來五十年、刻苦勉強して遂に振子を完成し、時間を測るに必要な器具としたのである。

ガリレオは又、望遠鏡の發明者として知られて居る。嘗つてオランダの眼鏡工が遠方のものを近く見せる一種の器械を作つて、ナツソーのモーリス伯に獻上したと云ふことを聞いて、偶然思ひついたことから研究したものである。

總て物ごとを見るに漫然として居ては、何ごととも發見することは出来ない。綿密なる観察は知識の源である。古來の大發見、大發明といふものは結局觀

察の功に外ならぬ。呂氏春秋に「瓶水の凍るを見て天下の寒を知る」と云ひ、淮南子に「小を見て大を知る。一葉の落ちるを見て、歳の將に暮れんとするを知る」と云つてゐる。吾々は常にこの綿密さを以て、物を見、事を聞かねばならぬ。

目立たない仕事

人があまり好まない商賣や目立たない仕事は得てして利潤が大きいものである。この點に着眼して身を投じ、大成功した人は、東洋ランル株式会社々長小川福二氏である。

「ランル」と云ふと如何にも洒落て聞えるが、これを漢字で書けば襪襪即ちボロである。つまり吾々が使ひ古しのボロに加工する會社なのである。一口に襪襪屋と云へば誰でもあまり好まない商賣であるが、小川氏はこれに着眼して、

檻樓の再生事業を始めた。これが非常時下の今日、物資總動員、廢品の利用厚生運動の大きな國策に乗つて、現在では堂々五百人の従業員と二百萬圓の資本を擁し、同會社で加工再生されるポロの量は實に年三萬六千餘疋に及び、金額にして一千萬圓に達すると云ふ。

立志傳の常道の如く小川氏も、矢張りその日々の生活に追はれる水呑百姓の三男坊に生れ、漸くのことで小學校だけは終へさせてもらつたが、十三歳の時親戚にあたる静岡縣藤枝町の小川覺平商店と云ふポロ問屋に小僧にやられたのである。

その小川商店は、商賣仇の高木、橋本等と云ふ東京向島のポロ問屋の競争に遇つて失敗し、氏は二十五歳にして單身上京、矢張り獨力でポロ屋を始めたのである。

丁度その頃、東京に東京製絨株式會社と云ふ毛織工業會社が出来た。そこ

で使用する羊毛は濠洲から輸入してゐたが、古羊毛をも原料として使用して居たので必然的に毛ポロが要るのであつた。小川氏は早速、それに目をつけて、毛ポロの買集めに力を入れ、會社と契約して、相當の利潤を得たのである。それから次第に手を擴げ、従業員をドンドン殖して行つたので、遂にポロ問屋のみではをさまらず、ポロの再生事業に乗り出し今日の盛況を見る様になつたのである。

氣 魄

埼玉縣血洗島の僻村に生れた澁澤榮一は、少年時代茶の行商をしながら書道をも強して居た。後年澁澤子の書は山縣公、杉子爵の書と共に名士中の三大能筆家と云はれた程で、なか／＼書道にも優れた天分を持つてゐた。最初書道を以て身を立てようと思つた程であつた。

しかし子爵は、外に着眼した。即ち當時は丁度王政維新の前で、天下騒然たる際であつたから、男子と生れて、書道等で一生を終るのは、つまらぬ話だ、大いに國事に盡すのが男子の本懐であると、奮然起つて、官界に身を投じ、王政維新の後、彼は累進して大藏少輔にまでなり、天晴れ未來の大藏大臣たるべく囑目されたのであつた。ところが彼はつくづく思へらく、

「待てよ、大藏大臣や總理大臣には、俺でなくても、なり手は澤山ある。それよりも日本の經濟界は、丸で新開地で、何とかせねばならぬのだ、之は一番俺が前垂掛けになつて財界振興の爲に努力しよう」

と、こゝに二度心機一轉して、民間に下り我が國經濟界の爲、八面六臂の活躍をなし、終に我が財界の大御所となつたものである。

彼が最初の志望通り書家になつて居れば近代有数の書家にはなつてゐたであらう。又第二の志望通り進めば、大藏大臣はもとより、總理大臣にも累進して

居たであらうが、我が國經濟界育ての親として、代々の總理大臣の名は知らずとも澁澤榮一を知らざるものなし」と云ふ萬古不朽の功績は擧げ得なかつたであらう。

勇氣の要る仕事

一世の節儉家と云はれた安田善次郎をして、幾ら、借してやつても間違ひのない男だ」と感歎させた淺野總一郎は、我が國セメント界に不朽の名を轟かした天下の成功者だが、其の昔郷里越中から江戸へ出て來た頃は、全く裸一貫であつた。

そして日傭ひ人夫となつて若干の資金を儲け、今の帝大前あたりでおでんやを出し、日夜眞黒になつて働いて居たが、こうして毎日立派に商賣が出來るといふのも、一に世間様のお蔭であると考へ、雪が降ると雪掻きをなし、又常に

暇のある時は道に落ちた紐等を拾ひ集めて置き、雨降り等に通行人が下駄の鼻緒を切らして困つた者があつた場合は、鼻緒をすげかへてやる等社會に對する報恩の念を忘れなかつた。

或る日立派な青年紳士が通りかゝつたが、鼻緒を踏み切つて困つてゐるので早速駆けつけて、いつもの通り直してやると、青年紳士は財布を出し幾らかを與へやうとした。

「そんなものを頂く爲にやつて居るのではありません。どうせ手がすいてゐるのですから、社會に對する報恩の微意を表するだけなんです」

「それは感心なお心掛けだ。私は斯う云ふものだから、何か御相談があつたら訪ねていらつしやい」

と一枚の名刺を呉れて立ち去つた。その名刺には、大藏省出仕澁澤榮一とあつた。その後、淺野氏は横濱に出て石炭商を始め、澁澤氏の斡旋で、各方面

に賣り込み、遂に後年大成する礎地を作つたのであつた。

人の下駄の鼻緒をすげかへてやる等と云ふ仕事はお易い御用の様でなか／＼出来るものではない。然かも「たゞ」である。現代の氣取つた青年等には藥にしたくも出来ないだらう。秀吉ではないが天下を取らうとする者は人の草履をとるだけの勇氣がなければならぬ。

難事業に着眼

カニ罐詰で有名な日魯漁業株式會社の創立者堤清六氏は、外柔内剛よく難事業を開拓した快男子の典型である。

氏は青年の頃偶々日露戰爭に際會し、一軍夫として従軍、渡滿して東奔西走したのであつたが、戦ひは我が軍の連戦連勝で、やがてポーツマスの講和條約となり、和平回復したので、何か條約によつて得た場所に於て、新規事業を興

さんものをと志し、いろ／＼考へたのであつた。二十億の戦費と、十數萬の生靈を犠牲にして、得たものは、結局南滿洲の優越權と、樺太の南半及び露領沿海州の漁業權である。そして南滿洲の寶庫と、南樺太の開拓には何人も着目したものだ。沿海州の漁業は最も難事業として一般の人はあまり氣にしなかつた。氏は、この漁業こそ、國家の大局から見ても有意義な事業であり、海國日本として是非開拓せねばならぬ男らしい仕事だと信じ、斷乎として北海の征途に就いたのであつた。そしてカムチャツカの狂瀾怒濤を乗り切り、外國向きのレット・サルムを始め内地向きの鱈魚等の海産物を、次から次へと大量に生産し、水産日本の爲萬丈の氣を吐き、數千萬の巨富をなしたのである。

裸一貫から眞珠王

世界的眞珠王として、一代に數千萬の富を作り、貴族院議員にまでなつた御

木本幸吉氏も、そのもとは志摩國鳥羽港の貧乏なウドン屋の小作に過ぎなかつた。丁度氏が十八歳の時英國軍艦シルバー號が志摩の港に來たことがあつた。氏は軍艦に卵賣りに行き、彼等外人の生活振りを見て、外國貿易の有利なのに着眼し、爾來一意専心その方面の知識を研究し、先づ支那貿易を始めた。その頃偶々箕作博士が眞珠養殖可能論を發表されたので、それを讀んで、奮然、眞珠の養殖事業に着手したのが、そも／＼氏の大成への第一歩である。

しかし當時誰も氏の養殖事業が實際に於て、可能だと信ずるものなく、世間では御多分に漏れず御木本は馬鹿だ、氣狂ひだ、人間の力で眞珠が出來てたまるものかと云つた調子で、嘲罵冷笑の的となつたのである。併し氏は「今に見ろ」と堅い自信を以て熱心に辨天島の養殖場で貝殻を割つて居た。そして受難の三年は過ぎた。が、眞珠らしいものは一つも出來なかつた。世間は彌々攻撃をはじめた。融通はバツタリ止まつて、衣食にも窮する様になり、この事業

を繼續すれば一家を擧げて餓死せねばならぬ有様になつた。

しかし氏は撓まなかつた。何うせ駄目なら潔く此の事業と討死しようと思つて堅く決心し、更に血のにじむ様な苦しい思ひを續けた。すると翌年、丁度明治二十六年七月十一日、例の様に貝殻を一つ一つ見て行くうちに、ピカリと光つたものがあつた。

「お、眞珠！」

氏の目からは熱い涙がこぼれた。斯くて、四年越しの惨苦は遂ひに報ひられた。世間の冷罵は、一轉して絶讃と代り、爾後トントン拍子で盛運に向ひ、内地の需要はもとより、年額約百萬圓の海外輸出にまで發展し、千萬長者になつたのであつた。

人間の生贖

智慧伊豆と云はれた松平伊豆守も將軍家光の我が儘にはほと／＼弱つてゐた。お鷹野に出て浪人の妻を見染めて無理矢理に側室にしたがつたり、近習の侍を相手に剣道を試合ひ、阿部豊後が勝を譲らなかつたとして閉門申付けたり、武藝自慢から身分を忘れて辻斬りに出たり、當時未だ諸大名の向背常ない際に將軍の輕舉妄動は、輔佐の任にある伊豆守をして苦惱の種たらしめた。此の態を見た例の大久保彦左衛門、或る時城中で

「伊豆殿、近頃の御心勞お察し申す。大分御瘦の様であるが一つ人間の生贖でも召上つたら如何でござる」

と親切げに云つた。伊豆守は平素から彦左衛門の老獪を不快に思つて居たので、狸爺奴、又何を云ひ居ると思ひ乍ら

「お心付けは誠に忝うござる。が、人間の生贖ではちと手に入りにくう御座るで」

と皮肉り返した。

「なに、召上るとならば愚老の生膽を差上げ申さうか」

「それは忝けない。是非御願ひ申す」

「然らば後刻拙宅へ御使ひを下され、何か然るべき容れものでも持たせて」

伊豆守は、今度こそ狸爺を困らせてやらうと、早速銀の茶壺を持たせて生

膽受取りの使者を出した。

彦左衛門は驚く家來喜内を目顔で制し、銀の茶壺を受取つて、これを瓦の植

木鉢とすり代へ、梅干を一つ入れて布呂敷に包み喜内に持たせて、使ひの者へ

渡させ、

「大切な生膽、途中で落さぬ様に氣を付けて行かれよ」

と注意させた。

秘藏の銀の壺をまんまと、すりとられた伊豆守、カンカンに怒り、翌日彦左

衛門の登城を待つて、其の不信を詰つた。閉口すると思ひの外彦左衛門は例の

鳶の巢文珠山の手柄話を講じた揚句、

「結局、貴公は智者ではあるが、まだ膽が出来て居らぬ。その様な氣の弱い事

では將軍の輔佐は出来ぬ。宜しく愚老のやうな膽を以て、政務を見なさるがよ

い……」

とやつたので、流石の伊豆守も成る程と感ずる處あり、爾後その政事振りは

一段と光りを放つに至つたとの事である。

空手空拳

豪放を以て鳴らした三木武吉氏が最初逐鹿場裡に打つて出た時、舌戦數十回、
あらゆる秘策を練つて戦つたが、しまひ頃になつて戦費も盡さ果て、聲は枯れ、
身體は綿の様疲れて、最早や戦ふ氣力もなくなつた。

そこへ當時の選舉長安達謙藏氏が見巡りに來て、

「戦況はどうかね」

「いや、戦ひはこれからが一番大切だと云ふのに、最早や戦ふべき何物も持ち

合せません」

と悄氣ると、流石は選舉の神様と異名を取つた安達氏

「まだく空手空拳と云ふ武器があるぢやないか」

自己發見

人間は困苦窮乏に對抗する爲努力する時は、いつとはなしに自分の可能性と偉大性を發見するものである。即ち自分と云ふもののうちに潜在する眞の力を見出し、所謂實力を十分に發揮する。裕福安樂の生活に育つた者は氣の毒にも、自己の才幹技能を認める機會がなく徒らに偷安姑息になり、一生自己の眞價を

發揮することが出來ず、不活潑な日常を送り不愉快な平凡生活に終始し、遂に自己の有する偉大なる力を其の儘墓場へ持ち運ぶのである。要するに自己の眞價は唯自己の努力によつてのみ發揮せらるゝのであるから、努力を缺く人は折角有する自己の眞價を發揮出來ず、何一つ成功もせず、世を終るのですから、人生是れ位哀れむべきものはない。

とにかく人には誰にも、其の内部に何等か偉大な能力を潜有するものだが、平素はなかくわからぬ。一朝何事かに當つて努力發奮する時、何事か自分が人より優れてゐる點を發見するのである。それが即ち自分の長所である。自分の長所に着眼したら今度は忍耐強く、これを追求して十分に發揮しなへすれば、必らず人より優れたものが出来るものである。

世に棄つべきものなし

東京の某大出版社の編輯室で、ちつと時局の動きを見つめて居る一青年があつた。昭和十二年日支兩國の衝突で忽ち東亞全局の大動搖、引いては全世界に一大旋風を捲き起した秋のことである。

事變突發と同時に人々は時局の華やかな動きに湧き立つた。が彼は、『時局は必らず重大化し長期に亘つて繼續する。そこで當然起るのは我が國の物資問題である。何か自分達にも出来る御奉行の道はないか』と、爾來日夜頭をひねつて考へたが何分無資力な一青年に國策的大事業が着手出来る手段はない。

筆の立つ彼は、何か新聞や雑誌に執筆して天下の名士を動かさうと思つたが、無名な一青年の論説を掲げる新聞や雑誌はなかつた。あるにしても天下國家に輿論を捲き起す様な勢力のある新聞雑誌ではなかつた。「まゝよ」と

彼は大出版社の支配人の職をなげ打つて、一介の浪人として社會に飛で出した。そして、コツコツと何ごとかを研究して廻つた。彼は屑に目を着けたのである。當時屑屋の外は屑などと云ふ見榮のよくない問題を研究する者はなかつたため、彼の研究は總て、實際に即し第一歩から始めねばならなかつたので非常に困難であつたけれども彼は黙々として研究を続け、遂ひに昭和十三年七月「屑の話」と云ふ一冊の研究物を發表した。

丁度時局は一轉換して日本の物資問題が再吟味されて居る時だつたので「屑の話」は忽ち商工省、企劃院、國民精神總動員中央聯盟等の諸官廳を始め全國の新聞雑誌界に重要な示唆を與へ、國策「廢品回收及再生運動」に重大な役割を果した。日本全國の各府縣では競つて同氏を招待して講演を頼むと云ふ有様で一躍天下の名士となつた。昭和十四年二月十四日、大阪毎日新聞の如き大新聞が三段抜きの大見出しで同氏の功績を讃へて居る。無援無資産の一

世に棄つべきものなし

青年もその着想と、その初志を貫徹する意志さへ堅ければ、必らず國家に御奉
行の道はあると彼は身を以て示したのである。彼とは誰あらう。快漢關根喜太
郎氏その人である。

大金はねらはない

我が國財界で今大閥と云はれてゐる小林一三氏が、既に大成した後の話であ
る。或る日氏は自分が社長をして居る阪急鐵道株式會社の食堂で、一般大衆と
共に晝食に十五錢のカレーライスを食べ居た。すると氏の隣席のお客が、
「いくら安い飯でもこれでは、おかすが足りない。もつと福神漬でもつけてく
れたらよさそうなのに」
と不平を漏らした。小林氏は直ぐ立つて行つて料理場から福神漬を容器ごと
持つて來て先きのお客さんに

「どうぞお氣に召す程御あがり下さい」

と差し出した。小林氏の信條は常に大金をねらはず、大衆を對照にすると云
ふやり方である。一食に三圓五圓のお客様は大切には大切だが、現在我が國に
於いては、そう云ふお客様は先づ百人に一人の割である、五錢十錢のお客様こ
そ最も有難いお客様だと云ふ所に小林氏の着眼點がある。現在小林氏の經營下
にある東寶、阪急系の食堂其の他の事業は總て、大衆を對手にすると云ふ方針
で大成功を収めてゐる。

五錢十錢のお客様を粗末にする様な商賣が繁昌する筈のないことは、單に不
親切と云ふのみでなく社會に於て最も宣傳力に富んでゐるのは五錢十錢階級の
お客様である。「あの店へ行つたら、いつでも氣持ちがい」と云はれる店は、
一錢二錢の商賣でも町寧親切を極めて居る。大金のみねらつて、巨萬の富にも
等しい社會的好評を取り逃がす様な頭の悪い小商人が、いつまでも、うだつ

大金はねらはない

が上らないのは當然の話である。

熟慮断行

國家の進運と共に躍進せんとする者は常に聰明にして、堅實な心構へが必要である。

いつの時代でも事業勃興の氣運が動き始めると、熱狂する一般大衆は、玉石混淆、苟くも「新事業」と名のつくものはその事業の性質如何に拘らず、争ふて身を投じ、資金を投ずる有様である。されば聰明なる者は堅實に進んで成功し、不聰明なる者は不堅實な事業に手を出して失敗するのである。碁や將棋をやる場合、最初の一石一駒は下手な人は存在に打つ、そして戦ひ耐なはになつて始めて慎重に考へる。これは誠に着眼點が誤つてゐると云はねばならぬ。上手の人は最初誰でも打つ様な一石一駒を置くに慎重、半時間も一時間も考へてか

ら始めて手を下すのである。即ち十手も二十手も先きのことを考へ、對手が自分の考へ通り來る時は、注文通りと云ふもので、大局に於て勝利を占めるのである。事業も總てそう云ふもので、最初の第一歩が終局まで左右するものだから、よく考慮に考慮を拂つて、始めて断行せねばならぬ。そして一度意を決した上は右顧左眈せず、如何なる困難にも屈せず進むだけの勇氣と忍耐がなければ、人生のことは何一つ成就するものではない。

運命の開拓

米國鐵道會社々長アンダーウッド氏は獨力大成した人だが、同氏の一家言として發表したことに次の様な一節がある。

「余が知つて居る範圍内に於いては、微賤より身を起して名を成し、地位を得、或ひは財産を作つた人々は、一人として自ら如何にして成功したかを明言し得

るものはない。只だ、如何にして開拓したか、如何にして發展して來たか、如何なる機會を利用したか位のことしか言明出來ないであらう。

營業上の縁故もなく、資金もなく、教育もなく、而して成功せんとする者に對しては、余はその人物の如何を問はず、次の様に忠告するものである。

「出發點に注意せよ」

活社會に踏み出そうとする者は誰でも、目的相當の出發點に立つてゐるか、どうかを確めなければならぬ。境遇を作ると云ふことは、成功への缺くべからざる道程である。そして自分のなさんとする事業に就いては宜しく深く胸底に秘めて、みだりにおしやべりしてはならぬ、世には自己のしようとする仕事に就いて要もない人にまで吹聴して廻る者があるが、これは徒らに自己の立場を不利にするもので、可惜有望の計劃を畫餅に歸せしめるものである。功名心を有することはいゝことでも、これを秘密にすることが出來なければ何の價値も

ないのである。仕事を以て自分の實力を吹聴すべきであつて、言葉を以て披露することは百害あつて一利もないものである。

天下のこと皆この通りぞ

大橋宗桂は明國に渡つて醫術を學んだ人であるが、將棋に掛けても無雙の名手であつた。曾つて駿府の徳川家康の御前で、本因坊算砂と將棋を闘はし、執政本多上野介正純を始め、諸近臣悉く集つて勝負如何にと固唾を呑んで見物して居た。巳の刻、即ち今の午前十時から差し始め、彼れ一手此れ一手と段々差し進む内、宗桂側はどうしたものか次第に形勢悪くなり、愈々今一手で詰められるばかりになつた。最早勝負は誰が眼にも明白である。宗桂今は駒を投げる外はあるまいと思ひの外、ちつと腕を組んで盤を睨んで考へ込んだ。見物の人々は皆、

天下のこと皆この通りぞ

「最早や、手の下し様もない。全く宗桂の負けであるのに、今更ら何を考へるのだらう」

と囁き合つた程である。一刻、二刻（一刻は今の二時間）時は移つて早や夕刻になつたが、宗桂は尙も深く考へ込んで、其の身は宛ら「枯木寒巖の如し」と云ふ有様である。家康は退屈の餘りに一風呂浴びて來たが、宗桂はまだ考へて居る。更に晚餐を濟ませて來たが、まだ考へて居る。際限がないので家康は遂に辛抱が仕切れず

「とても今日中では埒は明かないだらう。上野介の所へおろして明日の事に致させよ」

と言ひ捨て、奥へ入らうとするのを宗桂は

「御前、今暫く」

と引止めて、ヒタ／＼と三十手ばかり差しかへし、物の見事に本因坊を打ち

破つた。家康は深く興に入り

「天下のこと皆此通りぞ、何事もこれが極まりと思ふて投げ出してはならぬ。誰が見ても既に詰まりたる勝負に要らざる工風立てだ、と皆思ひもし囁き合ひもしたが、三十手ばかり致しかへして相手を詰めた手際を見よ、愈々極まるまでは工風を要する物の試しぞ」

と一同を諭したとのことである。

三十年後の計劃

「今日なすべきことを明日に延す勿れ」と云ふ諺がある。苟くも理想あり希望ある者には、これはむしろ當然のことであつて何等積極的感動を我等に與へることではないと感ずるであらう。

然るに世間には、その當然のことすら之を忘つて今日のことを明日にし明後

日にする者があるから、その怠慢心を戒めて「今日なすべきことを明日に延す勿れ」と訓へたものであらうと思ふ。

しかしながら吾々はよく考へて見なければならぬ。今日の事を今日して居れば、それで能事畢れりとしてよいものだらうか、今日なすべきことを今日するのは世間並の當然であつて、苟くも世に出んとする者には斷じて當然ではないのである。今日のことをもう一日前にする。或ひは二日前にする。尙ほ進んで五日前、十日前にする。それでもまだいけない。一ヶ月前にする。一ヶ年前にする、と云ふ風にあくまで積極的に考へねばならぬ。現に吾々が家庭經濟の事を考へるに當つても、今月末の支拂ひを今月考へる様では決して満足な支拂ひは出来ない。來月末の支拂ひを今月考へ、更に事業が擴大するにつれて三ヶ月後の支拂ひのことを考へ、一ヶ年後の支拂ひのことを考へねばならぬ。それで始めて萬事自分の思ふ通りのことが出来るのである。

今假りに五日先に迫つてゐる事柄を友人に相談に行つたとする。その時にはもう内心相當あわてゝ居るので、その氣持ちが容貌にまで現はれて来る。斯うなつては、その事柄の爲に自分自身が驅使されて仕舞つて居るから既に遅い。もう人を動かすだけの力がない。結局友人はその相談に興しないと云ふやうな事になるのである。だから小事でも少くとも一ヶ月や二ヶ月先に考へ、大事なことは少くも三年なり五年なり先きの事を十分に考慮し、之に對應する方策を立てそれ〴〵處置して行くだけの心掛けがなければ大事業等出来る筈はないのである。

明治十一年赤坂紀尾井坂に於いて刺客の手に斃れた大久保公の懷の中には明治四十年までの計劃を認めた書類があつたと云ふが、國家匆忙の際、眼前多事多難の時局に於いて尙ほ且つその用意があつたればこそ、あれだけの大業が出来たと思ふ。この種の例は古今偉人傑士に少くないが、事をなさんとする者

は、誰でもその事の大小を問はず、常にそれだけの心の用意がなければならぬ。その心構へのもとに、今日割り當てられた事を今日中になすと云ふのが「今日なすべきことを明日に延す勿れ」と云ふ諺の眞實の意味である。まだくやるべき日は十日もあるからと思ふ様な心掛けでは仕事らしい仕事は出来るものではない。

武士の遊藝は肩に出来た腫物の如し

水戸中納言光圀の臣に熊谷宮内と云ふ者があつた。餘技に能をよくし達人の域に達して居た。光圀公度々その能を所望されたが、何時も病氣と稱して屹度辭退して居た。

或る時、江戸の邸に於て賓客を召待せらるゝにあたり、宮内には是非一曲を相勤め呉れよとの命があつた所、宮内は案外に

「委細 畏りました」

と異議なく御受けした。光圀も頗る満足の體で喜んだが、併し當日になれば、何れ又病氣とでも稱して斷るであらうと思つてゐた。

ところが、その日は何時になく出場して滞りなく得意の一曲を勤めた。流石は音に聞えた達人、頗る見事な出来榮えで、主客の感嘆言ふばかりもなかつた。やがて樂屋に引上げたが、病氣と稱して自宅に引き籠つたきり、五十日あまりも出勤しなかつた。

光圀も其の後感ずる所あり、宮内に能を命ずることを爲なかつたが、或る時、御前に於て夜話があつた折、諸藝の話となるや、宮内は

「武士は藝の爲に、名を奪はれぬことが、何よりも大事で御座います。悪く心得へれば、肩に出来た腫物の、首を押しのと様、藝ばかりになつて其の身は無用の人と相成りまする」

武士の遊藝は肩に出来た腫物の如し

と申すと、光圀

「なるほど」

と感心の態であつたが、後近侍に向ひ「宮内が度々能を辭退したのには何れ仔細のあることと思つたが果して思慮あつてのことであつた」

と告げられた。その後、宮内は次第に重用せられ、遂に政事のことにも與る様になつた。自分の本分を忘れて餘技を誇る様な者は、その著眼點が間違つて居ると云ふべきで、殊に藝が身を助ける様になつては男の本分とは云へないのである。

精神力の飛躍

「どうも人が多過ぎて仕事がなく全く就職難時代だ」とは何の時代でもよく聞くことだが、備入れる方から言はせると仕事がないのではなく役に立つ人がな

いのである。就職口を求めて居る人は頗る多い、が「この人なら」と思はれる様な人は誠に少ない。

「仕事がない、働き口がない」とこぼして居る人は、云はゞ「俺は役に立たない人間だ」と云ふことを宣傳して廻る様なものである。

自分の志す仕事に就かうと思ふ時、自信と熱意さへあれば必ず就職出来るものである。これは或る實業家の自序傳の中にある話だが大變好い例だから述べて見る。その人は十八歳の時上京したが、今から三十五年も前のことで、就職の口を探すに新聞の募集廣告もなく、又職業紹介所など云ふ便利な機關もなかつた時代である。或る日横濱に職を探しに出かけた所、ふと目についたのが、外國貿易をして居る商館で、店員入用の張り紙がしてあつた。よし此處にぶつかつてやれ」とつかくと其の商館に這入つて行つて店主に面會を求めた。

「君は未だ若い様だし、それに田舎から出たての様だが商館の仕事が出来るのか」

と問はれ

「やつて見ませんから、わからないが人に来ることなら、何でもやる決心です」

「月給は見習ひ中は四圓が普通だが、よく働いたら五圓出してもよい。十二分に働いてくれるか」

「十二分にも二十分にも働きますから、月給は八圓頂きたい」

と切り出した。店主は驚いて目を見張つたが、

「うむ面白い、ためしに使つてやらう」

と、そこで入社契約が成立した。所が、その人は英語は中學で教はつた位の實力しかなかつたので外人對手の會話などはとても出来なかつた。

「何でもやる」と言切つては居るし、月給も自ら八圓と切出して承諾して貰つて居るので、命じられた仕事は、サツサと仕上げ、餘暇があれば、必要な語學を勉強し死力を盡して働いた。實際半ヶ年位は不眠不休でやつた。お蔭で語學は次第に上達し、半年位の後には、他の同輩を凌いで外人對手の取引は全部一人で受持つ程度になり、店主の片腕になつて働くことが出来た。後獨立して今日の成功を収めたのである。」と語つてゐる。本人が書いたことだから少々おまけもあるかも知れないがとにかく人間にはこの位の自信を以て人に當り、ことに當つて、そして熱を以て仕事をやつて行けば、それこそ「不能」と云ふ語はなくなるのである。奇蹟と云ふことは物質的條件を超越する精神力の飛躍である。この精神力の飛躍なき一生はくずの一生と云つてよい。

昔支那に石虎將軍と云ふ人があつた。親が虎に噛み殺されたので、如何にもして親の敵を打たうと決心し、弓を持つて虎を探しに森林中を歩き廻つた。ふ

と向ふを見ると大きな虎が臥して居た。

「己れ親の敵」

とばかり弓に矢をつがへてヒュウと放つた。矢は弦をはなれて飛び、ねらひ違はず虎を射止めた。「やれ嬉しや」と走り寄つて見れば、こは如何に、虎と思つたのは虎でなく虎の形をした巖であつた。

「こんな巖をよくも自分の矢が突き貫したものだ」と驚き、更に自分の力を試す積りで再び元の位置に歸り、矢をつがへて射かけて見た。處が矢は當つても皆跳ね返されて巖には貫らなかつた。それは巖だと知つた爲であつた。これ等もたしかに精神力の飛躍と云へる。心の底から出た人の一念と云ふものはこう云ふ奇蹟を生むのである。

禍を轉じて福にする

誰でも人には失敗がある。損することがあり、馬鹿を見ることがある。それをいつまでも、あゝあの金さへ損しなかつたらとか、あの事業にさへ手を出さなかつたら……とか云ふて悲しんだり悔んだり愚痴を言つたりするのは愚の骨頂である。死んだ子の年はいくら數へて見たつて死んだ年以上にはならないのと同じで全く無駄なことである。

その無駄を無くするには、工夫一つで足りることに目をつけねばならぬ。即ち禍を轉じて福となすことは吾々に出来ることである。

失敗も苦痛も、神が吾々に教へる戒めとして之を利用することこそ一番賢明な方法である。彼のピーター大帝はチャールス十二世と戦つて敗るゝや「彼は余に戦術を教ふるものなり」と揚言し銳意その回復に努めたと云ふ。かやうに失敗を以て自己將來の發展の爲に大きな寶とするのである。失敗や苦い經驗から得た知識ほど將來役に立つものはないことを知るべきである。

誤魔化しては駄目

子爵石黒忠憲は

「どうも此の節は世の中の人々が眞面目でなくつて困る。例へば按摩なども昔は長い杖は按摩の特権であつて、長い杖を持つたものに衝當れば、眼明の方が罰せられることになつて居り、按摩は威張つて長い杖をついて歩いたものだ。然るに此の節は按摩が色眼鏡をかけ、短いステッキをつき、勉めて眼明と間違へられるやうにして居る。それでは按摩自身も始終心配であるし、又人とも屢々衝突するやうになる」

と話された事があるが、是は一例を盲人にとつたのみであるが、吾々眼明にも大きな教訓となるのである。吾々が知らない事を知つた風に見せかけようしたり、持たぬものを持つた風に見せかけようとする處から、いろ／＼悪い結

果が来るのである。人がこの世に生活して行くには出来る限り遠慮なく、負惜しみも虚偽もなく、億劫がらずに兒童の如き純真さと無邪氣さがなければ圓滑な世渡りは出来ない。

由來人は自分自身の上には解らぬことが多いが、利害關係のない他人のことは所謂岡目八目で案外よく解るものであるから、自分に解らない事、迷ふ事は先輩や師父や友人に相談して、一日も早く解決して又次の問題に向つて躍進することが必要である。それを負惜しみをしたり、隠しだてをしたりして、何時までも自分の心の中で迷ふて居ると、自分も苦しみ人にも迷惑をかけるようになるのである。だがこゝで注意せねばならぬことは、自分で解決出来るものも徒らに人に頼ると云ふ様な薄志弱行であつてはならぬことだ。たゞ外の人からは解決のヒントを得るだけにして實質的解決の鍵は最後まで自分で握つて居なければ人間の意志は向上するものではない。

後世への最大遺物

内村鑑三氏の著書「後世への最大遺物」と云ふ本の中に次の様な一節がある。

「天文学者のハーシエルは廿歳の頃友人に「此の世の中を私達が死ぬ時は私達が生れた時より少しなりとも善くして逝かうではないか」と言つたが彼はアフリカの植民地希望峰に行き、何年か苦心して南半球の星を調査して星圖を作つた。之によつて後年の天文学者はどれだけ利益を得たか知れない。夫れが爲に航海が開け、貿易が進展し、人類の幸福は増進した。」
又今から六百餘年程前に箱根の或る村に兄弟の百姓があつた。或る時弟が言つた。

「吾々は此の有難い國に生れて來たのだから、何か後世に遺して逝きたい。何か吾々に出来る事をやらうではないか」

と兄に計つた、兄は

「吾々の様な貧乏人では、何も大事業を遺して逝く事は出来ないぢやないか」とすると弟は

「此の山をくり抜いて湖水の水を引き水田を興してやつたら後世への大きな遺物ではないか」と提議したので、兄は

「それは非常に面白い。それではお前は上の方から掘れ、俺は下の方から掘らう。一生涯かゝつても掘らうぢやないか」

と二人は上下から掘り始めた。勿論測量器械などもない時代で、山の上に標を立て、掘つて行つた。兄弟は自分達の生活の爲の仕事はし乍らその餘暇を捧げて掘り続け、何年かの後にたうとトンネルを貫通して水を通した。これによつて何箇村かの村が水田を開き何百石かの米が取れる様になつた。

以上の一節によつてもわかる通り、人間が一度志を立て、何か社會人類の進歩と幸福の上に遺蹟を残さうと思へば、何ごとも出来るものである。貧乏だとか、力がないとか云ふのは、怠けもの、逃げ口上である。何ごとかやらうと云ふ意志さへ確立せば、必らず後世に残すべき偉大な仕事が見つかるものである。要は自分の力に適しい著眼點の如何にある。

英雄の眼

アメリカ獨立戦争の時、或る青年士官が一隊の兵を指揮して途中の障害物たる大木を取除かせてゐた。もう一息と云ふ所まで来たが、なか／＼大木は片付けられなかつた。士官はいらだつて、

「さあもう一息だ、ウンと頑張つて押せ〜」

と叱咤して居るが、一向ラチがあかなかつた。兵卒はへト／＼になつて喘ぎ

喘ぎ働いてゐるが、士官は傍に立つて怒鳴るばかりで一向手を貸さうともしなかつた。そこへ上官らしい騎馬の武官が通りかゝつた。彼は、ヒラリと馬から飛び降りて、

「サア私が手傳ふから今一奮發をして」

と云つて共に大木を片付けて仕舞つた。そして微笑し乍ら士官に云ふた。

「貴官は何故、自分で手傳ひませんか」

すると士官は餘計を事だと云はんばかりに、

「私は指揮官だから、指圖さへすればよい」と空嘯いた。

「あゝそうかね、諸君これからもあることだ。斯う云ふ場合には、私が手のあいてゐる時はいつでも手傳ふから私の所へ使ひを寄越しなさい。私は斯う云ふものです」

と名刺を置いて立去つた。名刺には獨立軍總司令官デヨージ・ワシントンと

あつた。一生一士官で送らねばならぬ者と、ワシントンとは、眼の著け所が違ふのであつた。

馬丁に目をつけた兆民

中江兆民は、何とか外遊したいものだと思つてゐたが、當時留學生はすべて官界からのみ選ばれ、民間の秀才は殆んど顧みられなかつた。彼はこの弊風を身を以て打破しようと決心し、或る日意を決して、紹介状も何も持たずに大久保内務卿を私邸に訪問したが勿論體よく玄關拂ひを喰はされた。翌日も、その又翌日も同様であつた。何分にも蓬頭垢衣の怪しい風體だつたので玄關子は碌碌取り次ぎもしなかつた。斯くて一週間も通つたが何の要領も得なかつた。しかし度重なるにつれ馬丁と顔馴染になつたので或る日菓子折を持參して馬丁に何とか卿に會ふ名策は無いかと相談した。馬丁も聊か氣の毒に思つて「で

は斯ようこうくしたら如何です」と、何事か兆民に策を授けた。

さてその翌朝になつて兆民は又卿を訪ねたが、例によつて公務多忙を理由に面會を拒絶された。彼は直ちに門外に出てそこにしばらく佇んでゐた。やがて大久保卿の馬車が憂々と驅けて來たので、彼は一先づ馬車をやり過ごして置いて、後の方から「オーイ〜」と呼はり乍ら、驅けつけて行つた。馬丁は約束の通り馬車をピタリと止めた。彼は隙さず窓口から卿を望み一禮して云つた。

「御出仕の御途上、誠に無禮で御座いますが私は過日十日間も御訪ね申し上げた中江篤介と云ふもので御座います。是非御願ひの儀があつて御面會を得たいのでございます」

と一氣に云つた。卿はデット兆民の顔を見詰めてゐたが

「あゝそうか、まあ馬車に乗り給へ」

と案外氣輕に云つて、馬車に乗せて呉れた。彼は臆せず卿の馬車に同乗し、

天下の大久保卿を前に、自分の理想を述べ、官學萬能の弊を説いて是非の際、民間からも海外留學生を出さざるべからざることを論じ、その手始めに自分を留學させられる様、卿の御盡力を請ふた。始めから例の黙々たる態度で聞いて居られた卿は、一言

「諾し、名刺を置いて行け」

と云つた。それから間もなく彼は「司法省出仕に任じ、三年間佛國に留學を命ず」と云ふ辭令を得たのであつた。

些細な事を見ても將來がわかる

平將門を討取つた依藤太秀郷は、最初將門に味方しようか、貞盛に味方しようかと迷つてゐた。そこで或る日將門の人物を観てやらうと思つて、それとなく會見した。當時將門は關東以北を切り從へて日本を二分し、その東方に覇

を唱へようと云ふ野心を持つてゐたので、地方の豪族秀郷が來たのを非常に喜び、大いに優遇し饗應したのであつた。宴酣なるや、將門は疎忽にも御飯粒の落ちたのを拾ひ、之を口にした。

この有様を観て居た秀郷、「苟くも平親王將門ともあらうものが御飯粒を落し、然かもそれを拾つて喰べる様では到底人の上に立つべき器にあらず」と終りに去つて貞盛に味方し自ら先陣を承り、將門を射殺したのである。



北條氏康は、父早雲の後を享けて關八州に覇を稱へて居た。或る時息子の氏政が茶漬をかきこみながら、お湯が不足したので更に又注ぎ足すのを見て、

「俺の家も、もう長くは續くまい」

と嘆息した。氏政は吃驚して

「どうして左様な事を仰せられますか？」

些細な事を見ても將來がわかる

「されば、一杯の茶漬を食ふのに凡そこの位のお湯が要るといふこと位もわか
らぬ様では、到底軍の掛引き等出来るものぢやない」
果して氏政の代となり軍の掛引きをあやまつてつひに敵に打ち亡ぼされた。

集注する力

如何に微力な人でも、其の全力を唯一つの目的に集注すれば、必らず其の事
を成就することが出来る。これに反し如何に有爲は人でも、多くの目的に其の
力を分散すれば、何一つ出来るものではない。点滴も一點に集中して墜つれば
巖をも穿つが、怒濤の如き洪水でも唯一回や二回で巖の上を越せば、何等の痕
跡をも留めないのと同じである。

由來人間には常日頃自覺しない餘力がある。それが、いざ鎌倉と云ふ眞劍な
場合に遭遇した時に現はれる。支那の李將軍が虎と思ひ込んで放つた矢は巖を

貫したが、巖と知つて後放つた弓勢は、何としても貫せなかつたと云ふ古事に
もある通り、物事に眞劍になると云ふことは、吾々の常識では判断出来ない偉
大な力が出て来るものである。物事に眞劍になれない人つまり力を一點に集中
することの出来ない人は、一生その有つて居る餘力を活かすことが出来ないで
不遇に終るものである。

金儲けのコツ

吾々の社會では、お金はどうしても必要である。何とかしてお金を儲けたい
ものだと思ふのは人情である。ところがお金はなか／＼儲からない。どうした
らお金が儲かるだらうかと日夜辛苦して居る者はあながち商賣人ばかりではな
いのである。

「金は儲けよう儲けようと思つてゐる間は、決して儲かるものではない」と或

る大實業家は云つてゐるが、誠に眞理を含んでゐる。つまり自分一個の爲めばかり考へてゐる間は斷じて金は儲からぬものである。自分の爲ばかりでなく世の爲め、人の爲めを考へて眞面目に良いことを世の中に提供する。するとそのことの中に我々の眞心がこもり、魂が入つて来る。それが他の眞心に通づる。そして自然と金が儲かる様になるのである。

世の爲め、人の爲めと思つてした事が結局は自分のものとなつて還つて來ると云ふ眞理を體得しない内は一時的の儲けは出來るかも知れないが大局的儲けは出來ないもので、共存共榮と云ふことはこの所を云つたものである。

古賢も「損して得とる」と云つて居るが、これは古今を通じての金儲けのコツである。世に利口らしく見えて、而も餘り利益を取り得ない人が多いのは、算盤を目先に取つて功利を一時に收めようとするからである。この様な人々には世の爲め、人の爲めにする事を迂遠だとか損だとか考へて、それが大得で

あることを知らないのである。

著眼の機微

現代の人々の中には、小賣業と云ふものは、極めて狹隘な限界しかないもので、無限に發達する可能性は先づないと思つて居る者が多い。が、これは既にジョン・ワナメーカーに依つて打破された考へ方である。

ワナメーカーが小賣店を開業した當時は、商賣と云ふものは、まるで戦争の様なものであつた。商人はお客に對しなるべく高く賣りつけるのを以て商賣上手となし、お客は商人に對し何の信用をも持つてゐなかつた。即ち商人は凡ゆる術策を弄し、客を誑かした。「客は自分で氣をつけよ」と云ふのはローマ以來の商賣道の格言であつた。かうした時代に、商賣は社會への奉仕だと喝破したワナメーカーの著眼こそコロンブスの新大陸發見にも比すべき大發見であつ

たのである。

人生の内容を豊富にする様な品物があるのに、これを消費者は知らないでゐる。商人はそれを消費者に出来るだけ少額の利潤で取り次ぐ、この商人の行爲は立派な社會奉仕だと云ふのである。この信念を以て居つたため、人間社會に商賣なるものが始まつて以來何千年この方築かれた商人と顧客との間の不信用は見事に打破されたのである。少額の利潤で欺かれる心配なく買ひ得ると云ふ顧客側の信認は、いやでも購買慾を刺戟するのであつた。これのみが小賣業をして無限に發達せしむる原動力である。學者は商業道德の發達を三期に分ち、第一期は勤勉節約であつて、第二期は正直であり、第三期は正義人道であると云つてゐる。この商業道德の發達過程は、ジョン・ワナメーカーの短かい商業生活に於いて確立されたものであると云つてよい。

躍動する著眼の妙

ワナメーカーは常に自分の商賣の繁昌する様な點に著眼して實行した。商賣人は誰もが「如何にして自分の店や商品を多勢の顧客に知らせるか」と云ふ事に苦心してゐるが、其の方法に新規を見出すことは餘程注意力のある者でない、うまく行かず、從來あり來たりの方法で満足し人事を盡した積りでゐる。今では、めづらしくもないことだが鉛筆や繪はがき、カタログ、價格表、カレンダー、風船等を最初に創案したのはワナメーカーであつて最初は常に人々の意表に出て宣傳効果百パーセントであつた。彼は常にめづらしい新規な方法によつて大衆へ呼びかけるように研究することを怠らなかつた。

そのうち面白いことは、彼が開業後三年目の時であつた。フィラデルフィア案内記に挿入する廣告を取りに來た男があつた。案内記には通例その巻末に多

くの廣告を掲載してあつた。彼はそんな廣告では何の役にも立たない。さう云ふ廣告は廣告料を溝へ棄てると同じであると考へた。そこで廣告取りの男に

「本文の頁の上に廣告をのせてはどうかね」

「さう云ふものは未だ載せたことがありませんので」

「それぢや各頁の上に載せて廣告料全部がいくらになるか發行者に聞いて貰ひたい。そして若しその廣告をお願ひ出来る様だつたら、表紙にうちの店の寫真を載せる様にしよう」

と、勿論その廣告料は普通より高かつたが、効果は大きかつた。一八六五年の案内記にはワナメーカーの廣告が獨り巻を壓してゐたのである。先づこつた風に彼の著眼點は常に他の人よりは一段と高かつた。

一枚の葉書

品川彌二郎子爵が内務大臣をやめられて山林會の總裁をして居られた時の事であつた。奈良縣の模範林を視察なさる爲、上市町の北村又左衛門と云ふ當時奈良縣第一の山林家の家に逗留されたことがあつた。

翌朝、食事が濟んだ後で皆が大勢で子爵の前に集つて居た時、そこへ主人の又左衛門が伺候した。その時子爵が何か用事があつたと見えて又左衛門に一枚のハガキを所望された。

又左衛門は早速小僧を呼んでハガキを持って來る様に命じた。間もなく小僧は一枚のハガキを持つて來たが又左衛門にそれを差出し乍ら云つた。

「旦那様、このハガキはお店用に付けて置くのでせうか、奥用に付けて置くのでせうか」

「これは奥用に付けて置きなさい」

と云ふ問答を聽いて居た子爵はハタと膝を打つた。

「其處ぢや！ それでこそ又左衛門の家は萬代ぢや、皆よく聴け、この大分限者の家で端書一枚の出納も忽せにしない、その心掛けが無くては、此の大きな家は持てないぞ！ こりや彌二郎感心致した」

と云はれた。ハガキ一枚や、煙草一本位どうでもよいと云ふ様なダラシのない考へ方のもの多い現代に於て、誠に味ふべきことで、又大物の品川子にしてこゝに目を付けられたと云ふことも見逃がせないことである。

四時間の利用如何

バブソンと云ふ人は、前後二十年もかゝつて過去百年間の世界事業界の動靜を調査研究し、有名な「事業時計」と云ふ名著を著した統計學の大家であるが、或る時、一人の青年が、

「先生は多年事業統計の御研究をなさつて居られますが、何か成功の秘訣と云

ふ様なものがありますか」

と伺ふと、バブソンは言下に

「勿論あるね」

と答へた。

「一つ御教示下さいませんか」

「午後六時から十時までの四時間を大切にすることだ」

青年には、どう云ふ意味だかよく飲み込めなかつたので、

「四時間を大切にするとおつしやいますと」

「人は會社にある間は、勿論大切な勤務中だから一生懸命に勉めて居る。しかしこれは當然のことで、誰でも殆んど大差なく努力して居る。ところが一度自宅に歸ると、ゴロ／＼して居る人間と勉強して居る人間とは大變な相違が出て来るものだ。午後六時頃から十時までの時間を自分の専門の仕事の研究に利用

して見給へ、一年三百六十五日として、一千四百六十時間もある。その時間を完全に利用出来たら必らず一かどの専門家になれる。一つの研究が済めば今度は次のものをやる。かうして十年も経てば、誰でも、十以上の専門家になれる。成功しよう等と思はなくても、周囲が押し上げる様な人間に必らずなれるものだ」

と説明した。

知識を求むる心をつかむ

「一つ雑誌を發行したいんだが……」

小學校教員、中等教員、大學の書記となつて見たが、これに甘んじて居られない野間清治氏は、突然途方もないことを言ひ出した。

「よし給へ、金も無い癖に雑誌など出せるものか」

友人は斯う言つてせゝら笑つた。實際それまで飲んべえで、貯蓄などもない

野間氏が雑誌を始めるなど全く途方もない事だと友人は思つたに違ひない。

「人に出来ることが俺に出来ない筈はない。必らず發行するよ」

「一體何の雑誌だ、雑誌なんて、随分金を食ふと云ふ話だぜ」

「雄辯雑誌だ、現在辯論の盛んなるを見給へ、各大學を始め地方の中等學校に至るまで皆雄辯熱に浮かされてゐるではないか」

「それは君が浮かされてゐるからだ。世間はそうぢやないよ。まあ悪いことは云はないから、そんな突飛な計劃は止し給へ、月給を貰つて居た方が平穩無事だぞ」

どの友人も、どの先輩も一人として同意してくれるものはない。流石に野間氏も沈黙した。「世間は自分が思つてゐる様なものだらうか、或は自分が辯論が好きだから一種の錯覺に陥つてゐるのだらうか。」と、頻りに考へ抜いた舉

知識を求むる心をつかむ

句矢張り、雄辯は新興日本の先達であり、凡ゆる學術、思想の發表も辯論程有力なものはない。自分の信念は決して間違つてゐない、最早や何人にも相談する必要もない。やらうと決心したのである。

彼は知人先輩を訪ねて、いろ／＼の手蔓によつて愈々創刊せんとする雄辯の原稿を集めて廻つた。そして趣旨が結構だと云ふので、原稿料は出さないけれども好い原稿が澤山集つたので、

「これならばどこかで、採用してくれるに違ひない」

とそれ等の原稿を懐にしてその發行を依頼する爲出版元を尋ねて見た。ところが、どの出版元も

「どうも折角ですが、わしの方では御引受け出来ません」

と申し合せた様に斷られた。途方にくれた彼は、疲れた足を引づつて歸り、いろ／＼考へて見たが、どうも名案が浮ばなかつた。かくて、四五日尋ね廻つ

たが、どうもうまく行かない。或る日、彼は、目ぼしい出版社を探す爲、電話帳をめくつて居ると、ふと目についたのが、「大日本圖書株式會社」であつた。

わたしのは大日本雄辯會、これは誠に因縁のありそらな名稱だ、こゝなら屹度引受けてくれるに違ひないと早速同社を尋ねることにした。

幸に同社の支配人村田五郎氏の好意により、社長（當時宮川保善氏）を説きつけて、發行を引受けて貰ふことにした。正しい事は何時かは、實現するものだと云ふ信念を持つてゐた野間氏も、その時ばかりは欣喜雀躍おく所を知らずと云ふ有様だつたそうだ。

「編輯料として、あなたに賣れ行き千部に就き三十圓づつ上げませう。ですから賣れば賣れるほど、あなたの手當は殖えて行く勘定ですから」

と村田氏は野間氏を勵ましてくれた。千部で三十圓、一萬部で三百圓か、よし、うんといゝ原稿を集めてうんと賣れる様に努力しようと思は既に三百圓の

手當てを貰つた積りで喜んだ。

かくて雑誌雄辯は生れた。丁度明治四十三年のことである。ところが雑誌雄辯は矢張り野間氏の豫想通り非常な反響を呼んで創刊號が一萬五千も賣れた。圖書會社から野間氏の許に届けられた原稿料は四百五十圓であつた。(その頃まで野間氏は帝大書記として五十五圓の月給だつた)

勇氣百倍した彼は、その後益々元氣を出してよい原稿を集めたため、雑誌はすく／＼と伸びて行つた。

隴を得て蜀を望むは人情の常で、雄辯で當りを見せると彼は講談雑誌を發行すべく計劃を立てた。生來野間氏は講談が好きであつた。

誠に面白くて爲めになる。これを聞くもの或は新聞等で愛讀してゐる者がどれ程多數だか知れない、これ等の讀者を目標にして講談物を出せば屹度大衆に受けるに違ひないと思つたのである。いろ／＼想を練つた結果彼はその計劃を

圖書會社の村田支配人に相談した。すると村田氏は、

「雄辯だけでもこれを守つて行くに大變なんです。この上又一つ創めるなど無鐵砲です」

と、今度はなか／＼云ふことを聞き入れて呉れなかつた。しかし一度云ひ出した以上、後へ退くのが嫌ひな野間氏は強硬に發行を主張した。圖書會社の幹部連を前にして

「雄辯は硬、講談は軟ですから、二者相携へて伸びて行けば、一方が伸びない場合でも片方が伸びる。硬軟兩派があつて始めて天下に普く雑誌が行きわたるものです」

「それは理想と云ふものです。實際はなか／＼そうは行かぬ、現に雄辯だつて廣告費とか營業費とかを差引くと損します。」

野間氏は、「それは經營が拙だからだ」と云ひたいのを我慢してゐた。すると、

知識を求むる心をつかむ

「何うしても、講談雑誌を出さねばなりませんか」

「折角思ひ立つたのですから、止めると云ふ事は考へたくありません」

とやかう云ひ會つて居る内、結局圖書會社では、とにかく幹部會を開いて相談の上返事する事を約して別れた。次の日、

「いろ／＼相談の結果、御引受けした雑誌雄辯も今月限り御断りします」と云ふ返事であつた。

流石の野間氏も驚いたが仕方がない。雄辯をやる一方講談俱樂部も愈々創刊すると云ふ大變な仕事を獨力でやつて行かねばならなくなつた。その後の同氏は、完く不眠不休だつた。朝から原稿集めに出る、資金の調達に廻る。よく精力が續いたものだ。後年述懐したことがある。

借金は親戚縁故者は借り盡して、高利貸しから借りあるいた。氏は易々諾々として日歩十五錢二十錢の金を借りたさうである。

油がなければ車は動かない。その際の油の價値は如何に高價でも、その供給に感謝こそすれ恨むことなんかないと云ふのが彼の金利觀であつた。

かくて、借り廻つた金の利子だけで、月二百圓餘にもなつたとの事である、かくして漸く講談俱樂部は創刊された。が、これは雄辯に反し、發行部數一萬の内賣れたのが僅かに一千部に過ぎなかつた、野間氏の夫人は山の如き返品を見て、流石に女だけに涙を押へることが出来なかつたさうである。かくして苦難の二三年は食ふものも食はず、着るものも着ないで過ごした。漸く利益らしい利益を見たのは三ヶ年後の明治四十五年からで、月二百圓位の黒字になつたと云ふことである。

その後野間氏は次第に經營の研究もし雑誌も次から次へと擴張したので、晩年にはキング、富士、婦人俱樂部、講談俱樂部、少年俱樂部、少女俱樂部、幼年俱樂部、雄辯、現代等九大雑誌を發行し、その總部數一ヶ月二百二十萬と

噂され、其の他單行本等の賣り上げを加算すれば年一千五百万圓の賣り上げを示してゐた。

私心を藏せず

先に大藏大臣兼商工大臣として、我が非常時財政を一手に引受け、國民をして盤石の如く安堵せしめた池田成彬氏はよく然諾を重んじ、利慾に囚はれず、名聲を欲せず、毀譽褒貶に超然たる大人物であることは誰もが知つてゐる。氏は表面冷靜鐵の如くにして裏に燃ゆる熱情を藏し清廉潔白にして然かも闘志満々、その剛愎果斷なることも亦有名なものである。曾て我が政界にあつて、元老伊藤博文公に對して君と云ひ得るものは、剛愎星享の他にはなかつたと云はれてゐるが、財界に於て澁澤翁を呼ぶに「澁澤君が云々」と語り、又その時の大藏大臣に頭を下げずに通し得た者は池田氏を描

いて他になかつたと云つても過言ではない。それと云ふのは氏の著眼點が常に天下國家の爲と云ふことであり、いささかも私心を藏しなかつたから出來たことである。

氏は三井銀行のために辛苦すること實に三十五年、その間一切の情實を排し、一意銀行業者としての本分を貫いて來た爲、時として冷酷の批評を受けたこともあつたが、これは氏の半面を見ただけで他の半面を知らぬ者の過誤である。氏が如何に決斷力に富んで居るかの一例は、大正十四年、大阪市の市價七千萬圓の債券を一手に引受けたことである。一銀行で七千萬圓の債券を一手に引受けたが如きは世界にもその例を見ない由である。それにしても大阪には住友、三十四、山口等の銀行があるに拘らず、三井が一手に引受けたのは何故か、言ふ迄もなく一番金利が安かつた點に著眼したが爲であつた。爾來金利は低落一方であつた故三井はその先見の明を誇り得たのである。

私心を藏せず

氏は舊米澤藩の家老の家柄に生れ、慶應大學を出て米國に留學した後、一時、時事新報の記者となり、間もなく記者生活を打ち切つて三井銀行に入り、その材幹を見抜かれ足利の支店長として地方勤務をしたのみで、本店詰になつてからは一度も地方廻りをせず夙くから重要な人物として今日あるを期待され、營業部長として十數年、常務理事として十數年、その才幹は遺憾なく發揮され、三井を去つて後も我が財界の第一人者として、超非常時内閣の大藏大臣兼商工大臣は氏を措いて他にないとまで國民的信頼を得たものである。

國家的事業に著眼

我が非常時産業界の三羽鳥の一と云はれる日本産業の鮎川義介氏は明治三十五年東京帝大機械工學科を出た技術家出身である。最初帝大を出て東京の芝浦製作所に入つて日給四十錢の職工となり、後米國に渡つてイリーマレー爾鑄物

工場に入り一心不亂に仕事のコツを體驗したのであつた。

今や彼の經營にかゝる日本産業をはじめ、その子會社たる日本鑛業、日立製作所、戸畑鑄物等々いづれも増配増資の好潮に乗り、株式市場の人氣の過半パーセントを壟斷して居ると云ふのも、一にかゝつて氏の著眼點の非凡なるを示してゐるものである。技術家出身で身邊に何一つ暗い影のないところが、彼の強味で、しかも普通の事業家と異つて哲學を有ち、強い信念の持主である。事業の著手にあたつては、先づ確りした計畫を立て、側目もふらずに邁進する。眞に事業に生きると云ふ眞劍さに燃えて居る。世の毀譽褒貶に頓着しないあたりは久原房之助氏をつくりだが、膽玉は久原氏以上に大きいと云はれてゐる。氏は常に國家的事業を畢生の目的とし、國家の進展と共に進展する腹で事業を着手すると云ふことも見逃がせない。だから氏の事業に對する信念も、愈々強固になり、何ごとが起つても、何ものが來てもビクともせず邁進するのであ

る。今後我財界の一角を背負つて立つ氏にかけられた期待は誠に偉大なるものがある。

常に第一線に立つ

米國軍需品王シユワツプは青年の頃ブラドックと云ふ田舎町の或る食料品店で賣子をしてゐた。

或る日のことこの食料品店に、ビル・ジョーンズと云ふ當時カーネギーの右腕と云はれたトムソン工場の所長が買物にやつて來た。ジョーンズが歸らうとすると、シユワツプ青年は突然聲をかけた。

「ね旦那、私を旦那の工場で使つて下さいませんか」

ジョーンズは吃驚して振り向いた。

「俺の所でかい。だつて君は此處で大そう優遇されてゐるぢやないか」

「え、まあ何うにかやつてゐますが、私の希望は鋼鐵業に入りたいんです。月給わづか六十圓の番頭が鋼鐵業に入る！ 巨萬の資本家でもあるまいし、その大袈裟な云ひ分はジョーンズを苦笑させた。彼は皮肉な口調でこれ亦突飛な質問を發した。

「君、棒杭を叩けるかね」

すると青年は平氣で

「造作もないことです」

「大丈夫か」

「大丈夫ですとも、叩くことなら何でも叩けますよ。何しろ子供るときから滅多に人の叩かないものを年中叩いて來たんですからね」

「何だいそれは？」

「馬の尻ですよ」

聞いて見たらシユワツプ青年の父親は驛馬車の馭者で、彼は少年時代から父親と一緒に馭者臺に乗せられ馬の尻を叩き乍ら成長したのであつた。

「あつはつはは、そうかいそれは秀逸だ」

ジョーンズは哄笑した。そしてこの青年は、その翌日から日給二圓でカーネギーのトムソン工場で棒杭叩きとして雇はれることになつた。

これが抑々シユワツプが鋼鐵業に足を踏み入れる第一歩となり、同時に出世のスタートとなつた。

この日給二圓の棒杭叩きは六年の後にはジョーンズに代つて、この大工場の所長となり、三十五歳の時には早くも當時米國一の鋼鐵會社と云はれたカーネギー會社の社長になつてゐたのである。

この無經驗な一青年が、どうしてそんなに早い出世の道を切り開いたか、理由は簡単である。無駄に棒杭を叩かなかつたからである。棒杭を叩きながらも

彼は工場の凡ゆる仕事に氣を配り、日給の倍以上の仕事をしてゐた。その撓まざる努力と、飽くことなき研究心！ が年齢を超越して彼を大會社の大社長にのし上げたのであつた。

當時所長ジョーンズはカーネギーに會ふ度に

「工場に落ちてゐる釘一本まで何でも知つてゐる男は、私とそれからシユワツプだけでせうな」

と自分の掘り出したこの有爲の青年を自慢してゐた。

カーネギーも氣をつけて見ると、なる程シユワツプの仕事振りと研究心の旺盛さはズバ抜けてゐる。彼も亦、云つた。

「鋼鐵のことなら、世界の人間を全部集めたよりもシユワツプ一人の方がよく知つてゐる」

かくて彼は三十五歳にしてカーネギー鋼鐵會社の社長となり、更に四十歳の

時にはその斡旋によつて、資本金二十億圓の世界最大の鋼鐵會社ユー・エス・スチールが創立されて、彼自らその社長となり、年俸二百萬圓と云ふ世界一の高給を受ける身となつた。

しかし如何に高給を取り、大會社の社長でも、それまでは使用人の尤たるものに過ぎなかつた。彼が獨立の事業家として小なりと雖も一國一城の主としてスタートを切つたのは、ユー・エス・スチール社長を辭して、自らベツレヘムと云ふポロ鋼鐵會社を買収したときであつた。シユワツプの四十三歳の時である。

當時人々は

「惜しい人物だがシユワツプもこれで没落だね！ なにしてあのポロ會社では

ね」

と批評した。しかし彼は、腕一本、脛一本でこの無力なるベツレヘム會社を提げてユー・エス・スチールに對抗しようと思つて目を着けたのだからえらい。

彼は全財産をこれに注ぎ込み、又彼の信用の許す限り金を借り盡して費用に當て、そして背水の陣を敷いた。彼は十五名の重役を選んだ。その重役といふのが一人のこらず、これまでベツレヘムの工場や事務所働いてゐた月給百圓か百五十圓の薄給ではあるが有爲な青年ばかりであつた。

自ら任命した十五名の新重役を集めて彼は黙つて上衣を脱ぎ、さて云つた。

「さあ、これからが男子の仕事だ、やらうぜ！」

その聲に應じて、十五名の青年重役たちは起ち上つた。そしてシユワツプを先頭として勇氣凛々たる作業服に身を堅めた。重役たちはいきなり工場にとび込んで汗と埃にまみれ乍ら職工達と一緒に、ハンマアを振つたのである。

かくて會社の成績はぐんぐよくなり、

「歐洲大戰と云ふのは、つまりアメリカのベツレヘム會社がドイツのクルツプ會社に勝つたといふことなのだ」

と云はれる程になつたのである。今やベツレヘムは世界最大の軍需品會社として全世界を睥睨してゐる。

青年志を立て、萬難を排して刻苦勉勵し、立身出世して行くことは世間あり勝ちのことであるが、一旦成功した人間がその榮ある地位を振り棄て、再び裸一貫の人間となり、スタートしなほすと云ふことは至難中の至難事である。シユワツプはそれをやつてのけたのだから、彼の著眼點が如何に自信に満ちたものであつたかと云ふことがわかるのである。

神影流の極意

松平恒雄氏は若い頃、劍豪榊原健吉氏の道場に通つて劍道を習練して居た。誠に熱心であつたのでその腕前もめき／＼上達して、師の榊原氏も内心舌を捲く程であつた。榊原氏は舊幕時代、徳川の講武所師範を勤めて、彼の有名な天

野八郎や、山岡鐵舟などと肩を並べた劍豪で神影流の達人であつた。

ある盛夏のこと、猛烈な土用稽古を終つて弟子たちが汗を拭いてゐる所へ榊原師が現はれ

「おい松平、今日は一つ道具なしの稽古をしてやらう。真劍のつもりで向つて来い」

ぼいと投げ出された竹刀を受け取つた恒雄は當惑した。

「師匠は無茶なことを云ふものだ。俺はいゝとして、老師匠に怪我でもさせてはいけないが」

と思ひ乍ら、さりとて師の言葉に叛くわけにもゆかず、澁々竹刀をとつて立ち上つた。

「さあ来い」

と老師匠は正眼に構へられた。その時恒雄の心にふと思ひ浮んだのは、

「さうだ、一つ俺の上達した腕前を同僚共に見せてやらう」

と云ふことだつた。彼はいきなり竹刀を大上段に振りかぶつて立向つた。

とたんに、榊原師は「エイ」と一聲諸共に彼の手許に飛び込むやいなや、いきなりいやと云ふ程胴を撃つた。不意を喰つてたじろぐ隙に、二の太刀が彼の小手にぐわんと當つた。あつと思ふ間もなく、不覺にも竹刀は彼の手から落ちた。榊原師は攻撃の手をゆるめず、面と云はず、胴と云はず滅多撃ちに撃ちのめしたので流石の恒雄も氣を失つて倒れた。

やゝ暫くして彼が正氣を取戻した時榊原師はちつと彼を見据ゑて云つた。

「松平、お前の腕は上達した。がお前の魂は成つては居らんぞ」

「は、どうも恐れ入ります」

「何だ、今のざまは、小敵と見て侮らず、大敵と見て怖れず、如何なる敵に向つても必らず正眼に構へて十二分の用意をして臨まねばならん。それが劍法の

極意だ、劍道は興行物や芝居ではない、華々しい技術を示さうと思つて大上段にふりかぶつたり等するのは劍法の邪道だ。わかつたか」

恒雄は自分のたかぶつた心を愧ぢずにはゐられなかつた。その後彼は専ら神影流の正眼正攻法を研究し、遂に榊原名人から免許皆傳の許しを受けるに至つたのである。

松平氏の人生觀、處世觀は常にこの正眼正攻法によつたことは云ふまでもない。彼が國際軍縮會議の我が首席全權として出席した當時、米國が途方もないフーヴァ案なる横車を押して各國全權を狼狽させた時、彼の沈着極まる態度は實によく彼の修練された心の態度を表はしてゐる。

歐洲大戰後世界の經濟霸權を握つた米國が歐洲各國の財政經濟の癌である賠償戦債問題と云ふ九寸五分を懷中にして高飛車に各國軍備の三分の一天引を主張した。このフーヴァ案には各國とも度膽を抜かれた形であつた。我が松平全

権だけは暫くおちつと落ち付いて米國案なるものを静観して居た。そして、大上段に振りかぶつて大見得を切つたフーザ案が、その實は隙だらけであることを見破り、英、佛等の全權團と會見協議してこれを不發彈に終らしめたのであつた。

彼の沈着なる正眼正攻法から體得した外交術と、敵を目前に控へた瞬間の明快なる洞察力、そして正しき熱誠と底力は、如何なる老獪極まる曲者と雖も屈せしむる力を持つてゐたのである。

風流は其處ぞ

茶道の大家千利休は名を宗易と謂ひ、通稱を與四郎と云つてゐた。初め茶道を北向道陳に學び、後更に武野紹鷗に就いて學んだ。他日棟梁の材となるべき木本は嫩芽の時から既に空を凌ぐ勢ひがあると云はれてゐるが、他日、巨匠た

るべき才幹は既に少年の時から群を抜いて居た。その一言一行は自ら脱俗の氣風があつた。師匠の紹鷗は早くも與四郎少年の才幹に目を着け何かと彼を注目するのであつた。

或る日、利休を呼んで、

「與四郎、庭の掃除を致せ」

と命じた。利休はハツと畏つて、其のまゝ庭の方へ行つて見れば庭は綺麗に掃き清められて、箒の痕もいと鮮やかに残つてゐて、木の葉一片もない。普通の者なら、

「掃除されて居ります」

と報告すべき所であるが、利休はハテなと思ひ思案すること暫し、やがて何か思ひついたらしく、庭の林中に立ち入り樹木を揺り動かした。黄葉は片々として、青苔の上へ落ち、庭中更に一段の風趣を添へた。利休はそのまゝ師匠の

前まへに行ゆき

「掃除さうじは早はやや濟すみました」

と報告ほうこくした。紹鷗せうおうは如何いかなることを爲なしたかと、庭にはに出でて見みれば、この光景くわうけいなので、思おもはずハタと手てを拍うつて感心かんしんした。

「出来でした與よ四郎しやう、風流ふうりゆうはそこぞ」

と叫さけんで、その奇才きさいを譽ほめ、その後祕訣ごひけつを傾かたむけて悉こまごまく利休りきゆうに授さづけたのであつた。奇才利休きさいりきゆうの著眼點ちやうがんてんは矢張やはり凡俗ほんぞくの思おもひ及およばない所ところにあつた。

俳歌と著眼點

詩歌しいか、俳句はいく等なごを作るには常入じやうにん以上いじやうの明敏めいびんな觀察眼くわんさつがんがなければならぬ。最も適もつと切せつな點てんに著眼ちやくがんして明快めいけいに云いひ現あらはしたのが名作めいさくとなるのである。

榎本えのもと其角きかくは蕉門せうもん十哲じつてつの隨一ずいいつと云いはれた人ひとだが、その三十三歳さんじっさいの時ときであつた。

門人もんじんの白雲はくうんと云いふ南茅場町みなかやばちやう廻船問屋かいせんもんやの主人しゆじんに誘さそはれて、墨田川すみだがはへ納涼なふりやうの舟ふねを浮うかべたことがあつた。そして上陸じやうりくしたのは三圍神社みやのぐらじんじやであつたが、そこには大勢おほぜいの農民のうみんが打ち集あつまつて雨乞あまごひの祈禱きたうを行おこなつて居ゐる所ところであつた。同行どうぎやうの一門人もんじんが其角きかくに向むかつて

「如何いかで御座ございませう宗匠そうしやう、一つ名句めいくを吐はいて雨あめを降ふして下くださつては」

と言いつた。其角きかくは

「馬鹿ばかなことを」

と苦笑くせうしたが、農民のうみん共どもは其角きかくを見みて出家しゆつげなりと思おもひ、其の前まへに跪ひざまづいて

「お上人じやうにんさま様さま、どうぞ御慈悲ごじひにお願ねがひ致いたします」

と口々くちくちに哀願あいぐわんするのであつた。其角きかくは今いまは辭じするに辭じし兼ねかねて

「然しからば一つ祈いのつて見みよう」

と思おもひ、神前しんぜんに額ぬかづいて、暫しばらく默禱もくたうしてゐたが、やがて矢立やたての筆ふでを執とつて認した、

めたのが

ゆふ立や田をみめぐりのかみならば

と云ふ一句であつた、すると須臾にして黒雲むらくと天の一角より起り見る、大雨沛然として降つたと云ふのは、こじつけとしても、俳句としては誠に名作である。この句は能因法師の

天の川苗代水をせきくだけせ

天くだります神ならば神

と云ふ和歌に基づいて、ゆたかの三字を頭文句にして、豊作を祈る心を籠めたのであつた。神前に祈る前にいろ／＼と想を練ると同時にその著眼點の非凡さがこう云つた名句となつて現はれたのである。

打てば響く弾力

「武藤、貴様ほど仕合せな奴は無いぞ」

「仕合せ？ 何が仕合せだ。仕合せなんて云ふものはみんな自分で拵らへるんだ。僕もその決心だ」

「馬鹿を云へ、貴様の親爺は貴様の爲に洋行資金を……」

「まあ、待て！ その洋行資金はもう吹つ飛んぢまつたんだ。僕の家は貧乏になつちまつたんだ。」

「おや妙なことを云ふね。貧乏したつて、それはほんとにか」

「失敬なことを云ふな！ 虚言をつかぬことを矜としてゐる僕だ」

武藤山治が慶應義塾を卒業する間際の話である。卒業と同時に英國に留學して政治竝に文學の研究をすることになり、嚴父國三郎翁は其の洋行資金まで用意して居たが、或る親戚が投機に失敗し、それを救ふ爲に殆んど全財産を抛つて仕舞つてゐたのである。

「ちや洋行は見合せか？」

「うむ英國行きは止めて、米國へ行く積りだ」

「見ろ！ 矢張り資金があるだらう」

「違ふ！ 自力で行くんだ。自分の力で勉強するんだ」

「さうかな、資金なしに洋行するなんて、出来るのか」

當時の青年には遠く外國に遊學するだけでも命がけの大仕事だつた。それを

武藤は勞働して學資を得ながら苦學すると云ふのだから、普通の學生には全く

無謀事であつた。

「貴様には分つても分らなくてもいい。僕は船賃だけあれば出かけるんだ。そ

れだつて、都合出来なければ自分で稼いで作る積りだ。少々骨は折れようが、

親爺の脛を噛むのとは比較にならないぞ」

「えらい、矢張り貴様らしい言ひ方だ、僕等には家運が衰へたのを、氣にもか

けない貴様の眞似は出来ん」

「意氣地のないことを云ふな、人生に盛衰があるのは當然ぢやないか、そして

災厄に奮起する愉快を味ふことは男子の本懐ぢやないか、鐘は上野か淺草か、

敲かれたら鳴れ……もつと強く敲かれたらもつと強く鳴れ、撞木が微塵になる

ほど敲かせて置いて、大江戸百萬の奴等に人生の春の榮光を聞かせてやる氣は

ないか」

敲かれれば鳴る。強く敲かれれば強く鳴る、この恐ろしい彈力こそ彼の眞骨

頂であり、彼の後年の成功の眞因であつた。

彼は慶應義塾卒業後渡米し、桑港の煙草製造所の職工として勞働しながら

らその餘暇に刻苦勉強した。次いでサンノゼ大學のスクールボーイとなつて苦

學し、更に桑港に戻つてジャバニース・ミカド・ソース販賣店の店員として

研究を續けた。歸朝後彼は東京銀座に日本で初めての廣告取次業を創めた、

打てば響く彈力

この新事業は相當困難であつたが、困難であればある程彼の弾力の試金石になつたのである。

「困難そのものは修養であり、教訓である」と彼の奮闘は愈々加つた。後外字新聞記者となり、次いで外國商館の店員となつた。さうした時に彼の運命に一大轉機が見舞つて金權王國三井入りとなり鐘紡社長、時事新報社長と躍進のコースをたどる様になつたのであつた。

均一商店の創始

日本で始めて均一店を試みて、成功した人は和田小太郎氏である。氏は東京本所に生れ、さしやかな骨董商の家に育つた。彼は大して教育があるわけではなかつたので横文字もよく讀む力がなかつた。それが歐米文化の産んだ而も嶄新な均一店を創業したのだから不思議と云へば不思議である。

和田氏は骨董商をしてゐたので古郵便切手の賣買もしてゐた。お客は日本の切手だけでは飽たらない。世界中の切手が必要だつたので、外國商店と取引をしておいた。外國の商人と取引をするには、どうしても横文字を知らねばならない。和田氏は非常に不自由を感じたので、自分の子供だけは、なんとしても横文字の讀める様に教育したいと云ふのが念願であつた。そこで食へるものを減らし、見る芝居も見ないで息子の鑄三郎君に高等教育を終へさせたのである。

そのお蔭で外國から送つてくる新聞や雑誌を息子に翻譯させて、その説明をして貰つて居た。或る日外國新聞に「最新式の商店」と云ふ見出しで均一店の廣告が寫真入りで掲載されてゐたので鑄三郎君が父親に話して聞かすと、「それは面白い。その廣告主に手紙を出して營業方法を問ひ合せてもらはん」早速問ひ合せた。案の條、大變有望だと和田氏は喜んで、自らやつて見たい

と思ひ、どこが均一店を開くによい場所か、日本橋か、上野か、銀座か、神田かと選んだあげく神田が一番よからうと、貯金三千圓と骨董品を賣り拂つた二千圓を合せ五千圓程で店を開いたのである。十錢均一品、十五錢均一品、二十錢均一品と陳列して賣つた處が、これが非常に受けて、日一日と繁昌し創業三ヶ年目には、約十萬圓の資財をこしらへる事が出来たのであつた。

流石の光圀も一本參る

徳川光圀が深く歸依して居た心越禪師は、明から渡來歸化した傑僧であつた。氣品高潔、資性溫雅で、平素は、とりわけて剛さうな所も見られなかつた。

光圀は、一度禪師の大度心膽を試みようと思ひ、或る日侍臣と喋し合せ豫め謀を廻らして置き禪師を招待した。

「何は無くとも、先づ一獻……」

と光圀自ら酒杯を師に獻げ、なみ／＼と酒を注いだ。禪師がやがて一禮して口に當てやうとした刹那轟然一發、ズドンと酒宴の床下から大砲を打ち出した。光圀の侍臣共は豫めこの事あるを承知して心を引緊めてゐたにも拘らず、酒杯を取り落した者もあつたが、禪師は泰然自若、手にせる酒杯に小波一つ起らなかつた。

光圀はやほら

「どうも御無禮仕つた」

と、頭を下げたが、禪師は一向氣にも介せず

「いや、もう砲聲は武門のたしなみ、別に御斟酌には及び申さぬ」

と云つて、徐ろに乾杯し光圀に返した。光圀はなみ／＼と受けて、將に口にせんとする刹那、青天の霹靂、

「喝ッ！」と大喝一聲されたので、流石の光圀も驚いて盃を取落して仕舞つ

た。禪師は平然として

「いや、喝棒は禪門の常で御座れば別に斟酌は致し申さぬ」

時に臨んで動ぜぬ禪師の心膽のよつて来る所を究めて行けば、人生如何なることにも動ぜぬものである。

お前たちの知つたことかい

根津嘉一郎と云へば、利殖一點張りで、社会や人のことなんか、かまはない人間の様に思はれて居たが、かつて七百萬圓を投げ出して武藏高等學校を建設したのは氏の一面をよく物語つてゐる。

氏は書畫骨董の蒐集家としても有名だが、最初、書畫骨董に金を惜しげもなく投ずるので、氏の後援で辯護士となつた廣瀬重太郎君がこれを見かねて、

「書畫も結構ですが、开廢無駄なものを買蒐めるより、其の金で社会奉仕で

もしたが、爲になりませんか」

と苦言を呈すると

「君等に何が解る。俺が斯うして蒐集するのは國寶ともなるべき日本の美術品が徒らに外國に散逸するのを惜しむからぢや」

成る程、氏が蒐集した書畫骨董は總て國寶になる様なものばかりで、若し氏の様な特志家がなかつたら、我國の由緒ある逸品がどの位外國に浚はれたか知れなかつた。氏が巨金を投じて書畫骨董を蒐集したのは、單に興味からしたのでなく、寧ろ其の散逸を惜しむ深謀からであつた事は後に至つて了解されたのである。

皮肉と諷刺

例の鳶の巢文珠山で、當時の大名共を困らせてゐた奇言奇行居士、大久保彦左

お前たちの知つたことかい 皮肉と諷刺

衛門の皮肉と諷刺は誰知らぬものもないが、或る時城中の溜りで列座の面々のうちで

「土井大炊殿はどことなく東照神君の面ざしに似てゐるが、神君の落胤ではな
いかね」

と囁く者があつたので、これを耳にした彦左老、早速口を尖らし、

「顔付きは、さまで似てゐるとも思はれないが大坂城攻の際、真田の軍勢に追はれて逃げた時の格好は酷似であるワイ」

又或る日將軍家光が旗本共を集めて名將批評座談會といつたやうなことを、催した。その席上家光が云つた。

「源義経には、辨慶をはじめとして佐藤忠信兄弟の如き、武勇絶倫、忠義一徹の臣が多かつた。名將にもそう云つた良臣が居なければ、氣もちの好い

戦ひは出来なだらう。」

すると例の彦左老

「左様では御座いますまい」

「なぜか、彦左」

「只今でも、辨慶や佐藤兄弟に優るとも劣らぬ忠勇の士は、この彦左を始めとしてこゝに多勢控へて居りますぢや、たゞ義経ほどの名將が上に居らぬで、氣持ち好い戦ひは、先づ出来ませぬ」

とつけ／＼云つたので、並居る連中はもとより流石の家光も目を白黒させて苦笑した。こうした機會でも捉へて以て直諫する彦左の目のつけどころは並大抵のものには出来ぬ藝當である。

家光が江戸城の西丸を普請した時であつた。完成した奉行の佐久間將監が案

内して巡見した後、家光は、さも満足そうに傍に供奉して居た彦左衛門に言つた。

「彦左、どうぢや、好く出来たらう」

彦左老は黙つて返事をしなかつた。

「聞えぬかの、彦左、好く出来た普請ぢやらう」

「さやうで御座います。先づどうやら出来上りましたやうで」

「まづいとも云ふのか」

「昔から蟹は甲に似せて穴を掘ると申しますが、この邸は下々の住居ならばそれでも宜しうござらうが、將軍家のお住居には、まるでお似合ひ申さぬ。第一鴨居が低い。高い兜をかぶつたり鎗を持つたりしたら、完く通れぬ。次ぎには廁が狭くて、それぢや甲冑を著け太刀を帯びては入りもなりませぬ。先づ普請としては、下の下でござらう」

と例によつてづけ〜言ひ出した。徳川も三代で緩みかけた、治に居て亂を忘れざる様にとの諷刺となつたわけである。

一圓の金が百年で一萬圓

ニコニコ貯金の元祖、牧野元次郎氏は、今でこそ資本金八百萬圓、預金總額四億八千萬圓の不動銀行の頭取として我が財界の大立物であるが、最初は一粒萬倍の貯蓄と云ふ振り出しで、誠に苦難の道を踏んで來たものである。即ち一圓の金を百年間預けて据置けば一萬圓にして返すと云ふ案を立て貯金の宣傳をした時分には、警視廳あたりから山師扱ひにされ、随分厳しい干涉を受けたものだつた。

處が發案者の説明によると、年一割の複利計算と、百年間の貨幣下落率、或ひは天災地變に據る契約者の減損等を觀ると決して無理ではないとのことだ。

つまり社會の進歩、物價の騰貴等により貨幣の下落が、牧野氏の目の着け處であつた。

後年になつて三井信託等でも、この故智にならつて、壹粒千倍、即ち千圓の金を百年後に百萬圓にして返すと云ふ貯蓄法を行つたが、これは千圓の金を年七分の複利計算にして、貨幣の下落率を計算に入れぬ勘定である。いづれにしても今から三十數年前に、貨幣の下落率まで計算に入れて、こう云ふ案に着眼した牧野氏の炯眼には敬服の外はない。

こゝが腕の見せ處

前田君は田舎から飛び出して來て或る工業會社の給仕になつた。

その會社と云ふのは、當時二三十萬圓の資本金で、前田君の同郷の先輩二三人で經營してゐたが、あまり成績の上らないボロ會社であつた。大抵の者はこ

う云ふ前途望みのないボロ會社に居ると自然に氣がゆるんで仕事もいゝ加減にする者だが、前田君は、さうでなかつた。彼は外の人が怠けて居る時でもコツコツ眞面目に仕事を續け、會社をあたかも自分のものゝ様に大切にしていゐた。重役や課長連は如才なく立ち働くと彼を可愛がつて、いろ／＼世話してやる氣持ちであるが、彼としてはあべこべに重役や課長連を世話してゐる積りで何くれとなく世話をやいてゐた。

當然彼の働きは認められて、丁度入社十年目には、人事係長にまで昇進して居た。人事課長の下で、人事行政を司るのであつたが、その課長と云ふのが、もう望みのない會社と見たから一寸も仕事を熱心にしない。従つて前田君の手にその重荷がかゝつてくる様になつた。

彼はこゝが腕の見せ處だと、至難の人事をさばさば片づけて行つた。ところが會社の成績は次第に不振に陥り、日露戦争の前年頃は全く仕様のない有様と

なり、このまゝ放つて置けば滅亡の外はないと云ふ悲境になつたのである。課長とか部長とを云つた人達は、高給ばかり貰つて仕事はしない。もう退職手当も出ないらしいと云ふ評判が立ち始めて、他の社員は一層怠慢になつた。こんな會社でいくら眞面目に働いても骨折損だと云ふ氣持ちで、會社の上役連はただ會社を食ひ物にし、會計を誤魔化して私腹を肥してゐる有様になつた。

丁度その頃人事係長になつた前田君の鋭い觀察眼は、決して之を見逃さなかつた。苦勞人の前田君はこの際勞働者の整理などに決して着眼しなかつた。少額な日給でその日／＼のしがない生活をしてゐる勞働者階級に斧鉞を加へて得意がる様な無定見な彼でなかつた。彼は決して安月給取りで満足するものでなく、〇〇工業會社の社長を目指してゐたのである。

會社の不振が世間に評判され、市場の株價は慘落を續け、五十圓拂込みのものが三十圓となり、二十圓となり、仕舞ひには、三圓か五圓でも買手が居ない

と云ふ状態だつた。しかし前田君は、決してこの會社を見放さなかつた。この事業は必ず見込みのあるものだ、と云ふ確信を持つてゐた。

「さうだ事業が見込みがないのではない。遊んで會社を食ひ物にする奴等があまりに多過ぎるのだ」

これ等を臆にしなければ會社は結核菌に蟲ばまれる人の様に、日に日に瘦せて後にはのたれ死する外はない。

重役連も愛憎をつかして、手離さうとしてゐる。前田君は固い決心をして、當時の社長小林氏の許にかけつけた。小林氏は當時既に天下の大實業家で、〇

〇工業會社の様な、ケチなボロ會社など、眼中になかつた、前田君がいろ／＼建言したけれど、會社に愛想をつかしてゐた小林氏は取り上げて呉れなかつた。

生みの親から見放されたボロ屑の様な會社を何とか建てなほして行かうとする前田君は奮然決心をした。

こゝが腕の見せ處

「そんなら、私に貴方の役目を委せて呉れますか」

「俺の投目を引受けなくても、君の経倫を行ふには、いくらでも方法があるぢやないか」

「思ふ存分やつて見度いと思つておますが、今のまゝでは駄目だと思ひます。

私は入社以來貯蓄した金がこゝに二千五百圓あります。社長の株をいくらでも分けて下さいませんか、そして私は自分の全生命を打ち込んで仕事が出来たのです」

「このボロ會社の株をどうするのだ、それより金を持つてゐたがいゝぞ」

「いゝえ會社と心中する決心でやる積りです。株が欲しいのです」

「さうか」

前田君の熱心さに小林氏も動かされて自分の持株中千株だけ、前田君の名義に書替へてくれた。一係長に過ぎなかつた前田君は一躍〇〇工業會社の大株

主になり、専務取締役として登場したのである。就任挨拶の翌日、彼は早速自

分の腹案になる冗員淘汰に乗り出し、何々重役の親戚だとか推薦だとか云つて

這入り込んで會社を食ひ物にしてゐた課長、部長連を片端しから片づけた。

「これからは粉骨砕心會社の爲に働きますから、どうか暫く御猶豫を願ひ度いし

と三拜九拜した者もあつたが、前田君は、「情は會社の爲でなく、又本人の爲

でない」と堅持して、誰もなし得なかつた人員の整理を斷行し、自ら營業部長、

販賣課長、人事課長を兼任した。樞要な地位を自分が占めることによつて始め

て眞剣に自己の経倫が行はれるのは當然で、爾來彼は死を賭して、會社を盛り

込すべく活躍したのであつた。

一方、市場に手を廻して株の買ひ集めにかゝり、彼の持株も四千株以上にな

つた。かくて會社は、次第に改善されたのは當然であるが、本編では彼の活動

状態を書くのを目的としない故略するが現在では、二百萬圓の大會社となり株

價も賣り手がなく、殆んど市價も立たない有様だが五十圓拂込のものが、百二十圓もする様になつてゐる。前田君は現に會社の社長たると同時に貴族院議員として、活躍してゐる。

自己推薦

中橋徳五郎が鐵道局長をして居た時の話である。氏の岳父田中市兵衛から商船會社の社長たるべき人物の推薦を頼まれた。そこで田健次郎氏を推薦した處、

「田ではどうも……」

と市兵衛翁首を捻つた。

「では、誰彼と云ふより私ではどうでせう、ワハツハツ……」

「いやお前なら申分は無し」

と云ふので話が纏まり、氏は局長の椅子を放り出して赴任したのである。賢明な氏は恐らく「大政治家たらんと欲せば、先づ富を作らねばならん」と云つたセシル・ローズの故智を學んだのであらう。果して商船會社の社業を大成した氏は、その後再轉して政界に入り政友會の中堅として、文部大臣に就任したのであつた。矢張り著眼と思ひ切りがピタリと會つて始めて、大物へのコースをとるものである。

馬鹿につける薬

何事にしても人の意表に出ることの好きだつた後藤新平が或る時京橋の星製藥株式會社に星一氏を訪ねた所、相憎く留守だつた。すると何思つたか、突然賣り場に廻り

「君の處に馬鹿につける薬はないかね」

自己推薦 馬鹿につける薬

と頗る眞面目な調子で尋ねた。すると店員は面喰ふと思ひの外

「へえ、只今製造中で御座います」

とこれも亦大眞面目に答へた。後に子爵は、そのことを星社長に話し「なか
なか使へる男だ」と推薦したので其の店員は一躍地方の支店長に拔擢され、次
第に重要な地位を占める様になつた。

漫談の大御所

何ごとにもせよ、大御所にさへなれば結構だと云ふのが現代人の理想だとす
れば、徳川夢聲君などは確かに成功者である。

彼は中學時代は數學が劣等で將來の見込みと云ふ點では、相當悲觀すべき子
だつた。父親は愛兒の爲に、あれかこれかと仕事を考へて見たが、何をさせて
も成功しさうにない。只だ一つ活動辯士の眞似は誠に上手であつた。一つ活辯

にでもなつては」と思ひついたので彼の運の開き始まり、映畫が未だ活動寫眞
と云つて辯士の名調子で客を呼んでゐた頃、今日比谷日活館の前身第二福
寶館を振り出しに萬春座、金春館、葵館と渡り歩いて、次第に人氣を獲得し、
その後震災前から新宿の武藏野館を根城にして、インテリ向きの名説明で東京
に於ける高級フアンの大向ふをうならせたものだ。

しかし活動寫眞から映畫、それにつれて辯士から説明者と變遷し、次にト
キーが現はれるにつれて、お先が見えて來た。その頃から彼は好きな漫談に
轉向し、今や斯界の大御所として君臨し、下卑でなく、キザでなく非常に洗練
された漫談を以てその名を天下に轟かせてゐる。彼は口も達者だが筆も達者、
自叙傳を書いたり、ユーモアを書いたり、兎にかくこう云つた方面では行く
して可ならざるなき奇才振りを發揮してゐる。

非常時に何のことだ

明治の初年の頃、大阪に筑紫山濤と云ふ少年書家があつた。當時の大阪府知事渡邊昇も頗る書道に興味を持つてゐたので、一度その少年書家を見たいと思ひ或る日、屬官に命じ山濤少年を招聘した。

山濤は非常に名譽な事と思ひ、父に伴はれて、知事官舎に出頭し、知事始め大勢の官吏の中で、鮮かな達筆を振つた。筆力雄健、墨痕淋漓、誠に素晴らしき出来ばえなので竝居る連中は、感嘆の聲を放つて賞めそやした。ところが渡邊知事は暫くちつと眺めて居たが、何思つたか、矢庭に、そこに在つた山濤の書を、ひつつかんで、庭前に投げ棄て、了つた。そして呆然として居る山濤を顧みて、

「いや驚くことはない。なる程美事なものだ。が、國家多事の際、お前程の

天才が書家位で満足する様ではいかん。何うだ、一番筆を捨て、經國の學問を學んだら、及ばず乍ら力になつてやらう」と泌々訓戒した。成程と氣付いた山濤は其の日から、筆を捨て上京して熱心に法律を勉強した。後の法學博士添田壽一氏が即ちその人であつた。

温情主義

元田國東は、その昔郷里大分で元田直と云ふ人の開いて居た漢學の塾に入り、秀才だといふので、元田直先生には實子があつたに拘らず、強ひて其の養子に迎へられたのであつた。養父母に對する氏の態度は終始一貫親切を極め、政治家として立派に一家をなしてからも、老父母を背負つて歩いたり、俸の乗降りには必ず手を引いたり、負うて上げたりしたと云ふ。

氏の皇室中心主義や温情主義はこの孝心から出發したもので、實に近年稀な

非常時に何のことだ 温情主義

人格者であつた。晩年は、その純情さから高橋内閣の改造劇の渦中に捲き込まれたり、床次、山本の泣き落としにかゝつて、憲本妥協劇の矢面に立つたり、子飼の乾分木下謙次郎に逃げられたり、兎角他に利用され悲境に陥り、心ある人々の同情を買つたものだが、これは吾々に大きな教訓を與へるものである。即ち純情も過ぐれば尙ほ及ばざるが如しで、西郷南洲翁が子弟に引きづられて、朝敵の汚名を着たのと同率に考ふべきものであらう。こゝまで行くと人間と云ふものは誠に弱いもので、英雄豪傑も遂ひ、凡人に墮ちて仕舞ふ。俗語に「千兩萬兩の度胸のよさも、人情からめれば弱くなる」と云ふ。心すべきは信念をゆるがす情の動搖である。

成功の側杖

人間は如何に偉い人でも獨りで成功することは出来ない。必らず相扶け相諫

め合ふ友人が必要である。

抑々人が人生に旅立つに當り、眞から打ち明けて語り合ひ、互に信じ、互に諫め、互に扶け合ふことの出来る友達を得ることは、人生として既に大なる幸福であり又成功の基である。

人は友人の感化を受くる事が多いから、悪友の爲に墮落する者が頗る多い。だから人は悪友を遠ざけ良友を選ばなければならない。良友を發見する第一條件は、其の性質が純良誠實なること。第二に何事か自分より優れた點のある人物、第三に責任觀念に富んだ實行的人である。この三つの點に合格する人なら、たとひ、完璧な人間でなくても、亦自分の性情と異つた人でも却つて友人として有意義な場合が多い。即ち短慮な人が重厚な友を持ち、熱血な人が冷静な人を友とし、或は創造的積極的な人が練達保守的な友を持つと云ふ様な事は互に、長短を調和し、陰陽相補ふて、好い結果を來すものである。古人も

「己に如かざるものを友とする勿れ」と云つてゐるが、これは、たゞ地位とか學識とか、年齢とかが己に及ばない者と交はる勿れと云ふのではなく、自分に比し、何等の長所もなく、只だ自分に阿諛追隨して來る様な低級の者は友とするなど云ふ意味である。こう云ふ低級な者と交はることは、徒らに繁雜と冗費を増し、時間を空費するのみであつて、相扶ける所か却つて仕事の邪魔になることを忘れてはならぬ。

好機はゴロくしてゐる

吾々は自分の職業をして居る間に、自然専門以外の事を知るに適當な機會がでて來るものである。其の好機を逸せず、出來るだけ多く見聞し調査し、要點を覺えて置くと云ふことは、成功への要素である。

英國の新聞王ノースリップは、或る時

「あなたが成功した秘訣を聞きたい」と云ふ青年に對し、

「自分は専心新聞事業に勵んだだけだ。自分は年少にして探訪記者になつた、以來寢ても覺めても新聞の事ばかり考へて居たのである」

と答へてゐるが、同氏は新聞に關係のある問題は細大もらさず調査研究してゐるが、その一面本業に妨げない限り好機に會すれば苟くも逸せなかつたのである。即ち

「自分は新聞を出すに紙が大切だと思ふて、加奈陀に行つた時にバルブ製造の事を研究して歸り、ロンドンに製紙工場を立て、居たから世界大戰の時には、自分のところの新聞だけは用紙に困らなかつた」と述懐してゐる。

又アメリカの鋼鐵王カーネギーは貧乏の爲め、十三歳の時に郷里スコットラ

好機はゴロくしてゐる

ンドから、母と共に移住地北米に行く船中に於ても、船の道具や機械の名や機能^{のう}を船員^{せんゐん}に教へて貰ひ乍ら船員の手傳ひをした。アメリカに着いた後は、木綿^{もめん}工場の糸巻小僧^{いとまきこぞう}になり、一週間二圓四十銭の賃金^{ちんぎん}にあり付き、次いで紡績工場^{ほうしんこうじやう}の火夫手傳^{くわふてつだひ}となり週給四圓に増給したが、その間にも断えず好機^{かうき}を逸せず、種々のことを研究してゐた。十五歳の時郵便配達^{ゆうびんはいたつ}になつた時には其の餘暇^{よかあひだ}を以て熱心に電信技術^{でんしんぎじゆつ}を習得^{しふく}してゐた。彼は何でも覺えて置けば何時か役に立つ時^{とき}がある^あると信じてゐたのである。果然彼は技師^{ぎし}の留守中に重要な電信^{でんしん}を受信^{じゆしん}して其の技能^{ぎのう}が認められ、十六歳の時には一躍電信技手^{やくでんしんぎしゆ}に任ぜられ月給五十圓^{げつきふ}を給された。其の後もひたすら努力と正直^{しやうじき}を以て事務に精勵^{せいれい}した結果は、先輩^{せんぱい}から認められ鐵工場の主任^{てつこうぢやうしゆにん}になり、どん／＼出世して遂に世界一の鋼鐵王^{かうてつわう}として其の富は數十億^{すうおく}を以て算される様になつたのである。

例へ話にもある通り幸福と云ふものは前額^{ぜんがく}にのみ毛があつて後ろは禿^はげてゐるものだから、幸運は向つて來た時、機を逸せずにつかまねばならぬ、一度通り過ぎて仕舞つたら最早や手を出しても捉へることは出來ないものである。

四角い重箱に圓い杓子

備前少將池田光政^{びぜんせうしやういけだみつまさ}が若い日のこと、板倉勝重^{いたくらかつしげ}に

「民を治めるの道を御教示願ひ度い」

と云つた。すると勝重は、

「左様ですな。例へて云へば四角な重箱^{ぢやうはこ}に味噌^{みそ}を容れ、圓い杓子^{しやくし}でこれを掬ふ様なもので御座いませう。この心得^{こころえ}が肝腎^{かんじん}かと存じます」

光政は暫く考へてゐたが

「どうも心得ぬ話ですな。重箱は四角なもの故、それを圓い杓子で掬ひましたら、隅々までは届きませうまいが」

「ご尤もです」

と勝重は當然の様な顔をして云つた。

「貴殿の様なお若い方が民政に心を傾けられるとは誠に殊勝なことです。が、察する處貴殿は必らず領國中の隅々までも残る隈なく見極め様となさるでせうが、それは先づ不可能な事で又決していゝ事では御座いません」

「それは又どう云ふわけです」

と光政は膝を乗り出した。

「他人のことは、假令領民で御座いまして、なか／＼自分の思ふ様にはならぬものです。それで寛にして人心を収めることが政治の樞要で御座います。つまり角の重箱から圓い杓子で搦ふ様に、少々手落ちがある位が理想的です。楊子で重箱の底をほじくる様に、あまり明敏にして苛酷に陥ると、しば／＼國を破ります。腹八分、政治も八分で御座います」

板倉勝重は京都所司代として多年人民の訴訟等を裁いて居ただけに頗る下情に通じ民政の要點を心得て居た、池田光政もその後「四角い重箱に圓い杓子」と云ふ訓を家憲とし政治を行つて、あつぱれ一代の名君と仰がれるに至つたのであつた。

實状をありのまゝ公表

曾つてピツクバーグで次の様なことが起つた。或る洋服店が將に破産に瀕して完く施す術のない迄になつたので、店主は當時アメリカ廣告界の第一人者と云はれたジョン・パワースの所に相談に行つた。パワースは早速店主から店の實状を聞き、次の様なことを云つた。

「この危機を脱するにはたつた一つの方法しかありませんね。實状をありのまゝ公表することです。この店が今破産に瀕してゐると云ふことを大衆に訴

へて、一舉に大量を賣り盡す策に出る外、如何とも仕様がないでせう」

「そんなことを発表した日には債権者が店に押しよせて豪いことになりはしませんか」

と強硬に反對した。パワースは

「そんなことは、どうでもいいことです。とにかく實狀をそのまゝ大衆に訴へる以外、私としては手のつけ様がないと思ひます」

その翌日、同市の大新聞に次の様な廣告が掲載された。

「弊店は今や將に破産に瀕して居ます。一萬五千弗の負債で手も足も出ない窮狀にあります。こんな廣告が出たら債権者から、どんな目に會はされるかわりませんが、事實ですから仕方がありません。たゞ一つ、皆様が明日來店されまして、御買上げ下さいませれば、その賣上げ金を以て債権者に支拂つて立ち直ることが出来ます。所が不幸にして御買上げを預きませんでしたら

このまゝ破産して仕舞ふ外ありません。ですから、明日は、全然損得の採算を度外視して、御覽の通り破格な値段で御願ひ致します」

この前代未聞の廣告は果然異常なセンセーションを捲き起し、當日は顧客が店頭に殺到して身動きも出来ぬ盛況を呈し、品物は殆んど賣り切れて仕舞ひ店は破産から救はれた。

その後、又外の店で、ゴム引外套の賣殘品の處分廣告を依頼されたのでパワ

ースは、

「一體どうしたのです」と尋ねると、店の販賣係は

「實は貴方だけに御耳に入れて置きますが、ゴムが變質してゐるのです。しかしさう云つたら誰も買ひ手はないでせうが事實はそうなんです」と答へた。すると其の翌日の廣告には次の様なことが書いてあつた。

「弊店は千二百着のゴム引外套を手持ちして居りますが、ゴムが變質し新品

としての値打は殆んどなくなりました。仕方がないので、これを安く賣り拂はねばなりません。何卒御來店の上親しく現品を御覽下さいまして、この値段なら買つて損はないとお考への方は是非御買ひ求め下さい。確かに御買得だと思ひます」

するとこの廣告文を見た販賣係は、目の色をかへてパワースの所へ怒鳴り込ん

んだ。

「あんな馬鹿なことを書いて、あれで品物が賣れると思ふんですか、變質したゴム引外套だなんて、」

ところが販賣係がカン／＼になつて怒つてゐる間に、一方ゴム引外套の方はドン／＼賣れて瞬く間に賣り切れになつて仕舞ひ、販賣係は開いた口を閉ぐことが出来なかつた。著眼點の相違である。

不便さに著眼

大正十二年頃石炭、機械の貿易商をして居た前川孫三郎氏は或る日家族づれで帝劇見物に出かけた。開幕一時間前に來て見ると帝劇の入口には長蛇の如く見物人が列をなして切符を買つて居た。前川氏は約三十分も待たされて漸く切符を手に入れることが出来た。

「つまらない時間を費したものだ、何とか、便宜な方法はないものか」

前川氏は芝居見物中も、このことばかり氣にしてゐた。それからいろ／＼人に相談して見たり、研究したりする内、外國に於いては、既に前から「チケツトエジエント」と云ふ切符の代理店が出來、相當の成績を擧げてゐることを知つた。前川氏は日本に於ても必らず成功するものだと思へた。第一に文明開化が進むにつれて人々が慰安を求めることは益々盛になり、事業としても非常に

大衆性があること。第二にストックが絶対にないこと。第三に貸し賣りが全くないこと等を考へ合せ、是非やつて見ようと決心し、當時の演劇界の大御所連に相談した處、皆快く賛成してくれたので、大正十二年七月一日、銀座二丁目「プレイガイド」を創立したのであつた。

最初プレイガイドと云ふ名稱が新らし過ぎて、顧客が何を賣る店だか知らず、宣傳には相當骨折つたけれど、しかし其の甲斐はあつた。即ち創業初日は三十七圓餘の賣上げしかなかつた店が、十五、六日目頃からは一日平均百圓位の賣上げを示す様になり、それから漸次發展して今では資本金二十萬圓の株式組織にし、支店七ヶ所も持つて非常な隆盛振りを示してゐる。

帝劇の前で待たされた不便さが氏には、日本に於いて初めての事業を起す原因となつたのである。幸福は不便不幸の姿をして人の前に現はれるとはこのことであらう。

表裏なき活動

仕事をするにしても、人と交はるにしても、忠實勤勉にして表裏がない様人は到る處で必要な人とされるものである。既に必要な人となるを得れば、その人の境遇は半ば成功の途上にあると云つてよい。その後の成功の遅速は各自の材能と境遇に依るものである。

人が若し自分の従事する業務に對し、單に生活の資を得る爲にする以外、何等の興味を有しないとしたり、その人は終生他人の指圖を受けて働かねばならぬであらう。

運命開拓の八大事

一、一時的の利益を、永久の利益と誤認するは愚の骨頂である。二十歳の人に對しての高給は四十歳の人に對すれば薄給である。

二、なるべく發展しつゝある事業に従事せよ。そして、言葉は常に誠實にして信頼するに足る様にせよ。

三、行儀作法に注意し、言語風采は快活なるべし。

四、練達は機敏に勝る。慇懃にして而も威容を失はない様に注意すべし。

五、書籍は多く讀む必要はない。最良の書を精讀せよ。觀劇も強ち悪いとは云はないが最良の劇を觀よ。

六、不平不満の人と交はるを避けよ。失敗つゞきの人に近づく勿れ。他人の瑕瑾を搜す癖習は一種の傳染病である。

七、貧しき首長となるより豊かな隨伴者となれ。善良な隨伴者は廣い世界を有するばかりでなく、一層利益ある世界を有するものである。

八、餘りに富者となるの必要を重要視してはならぬ。潔直にして材幹のある人は健康と品性を犠牲に供して資産を得た人よりも欽羨すべきである。小資産

でも満足せる健康の人は、百萬の資産を有する人と、其の幸福を同じふするものである。

青年は大體に於て理窟が好きである。彼等に嶄新な忠告を與へると云ふことは大變六つかしい。しかし陳腐な忠告も、之を實行すれば世人を刮目せしむべき結果を生ずるものである。古賢の金言もこれを實行せざれば半文の價値もないのである。

百姓の冷笑

觀世の十五代左近は不可院と號し、猿樂の名人であつたが殊に木賊刈を得意とした。寛保年中、京都の河原に舞臺を作つて棧敷を構へ、一世一代の勸進能を興行したことがあつたが日本一の能樂を見ようと遠近から集まつた觀衆は場外に溢れるばかりであつた。

興行二日目に、彼の最も得意とする木賊刈を演じた所、流石は名人、その巧妙さ、見事さに満場の観客は皆恍惚として酔へるばかりの有様であつたが、其の中に田舎者らしい十人ばかりの一團の見物客は、何かヒソヒソと囁き合つて、何となく冷笑する様な態であつた、左近は舞ひ乍らこの容子を見て、仔細があらうと察し、やがて能が終るや否や人を木戸に遣はして、何気なく木戸を出ようとする田舎者共を引き留めさせた。

田舎者の面々、「これは何事だらう」とビク／＼引返へして来たので、左近は懇ろに樂屋に呼び入れ、「今日、我等木賊刈を舞つた所、自分乍ら上々の出来と思つた丈けに、観客御一同も皆頗る満足の態に見受けられた。唯あなた方は何やら囁き合つて不満足らしいやうに思はれたので、これには何か理由があらうと斯くはお呼び留め申した次第ですが」と言へば、暫しお互ひに顔見合せて居た田舎者共、

「我等は信州菌原と申す所の百姓で、日頃木賊刈を業と致して居ります。今日は木賊刈の能興行があるとの事で、實は一生の話しの種にと見物に参りました所、流石に日本一の先生の藝、唯もうブツ魂消るばかりで御座いました。唯一つ、木賊を刈る場面でも我等の仕慣れた鎌の手とは違つてゐます故、あれでは手を切るだと思つた譯で御座います」

と語つた。左近は「それは誠に面白い話で御座いますな、して各々方は如何にして木賊を刈られるのか」

「左様で御座いますね。木賊を刈るには向ふの方へ一刀切りに致すもので、此方へ向けて刈るものでは御座いません。唯今拜見すれば同じ所を此方へ二刀お刈りになつた様だが、あれでは木賊は刈られません」

左近、ハタと膝を拍つて感心し百姓共にお土産などを與へて還へし、其の後

研鑽を積んで、數年後江戸で木賊刈を演じた時は、今度は向ふの方へ刈つたがその出来榮えは神技に入つて居ると云はれた。「耕は百姓に問へ、織は婢に問へ」とは實にこの事で、何ごとでも一流たらんと志すものは常にこの心掛けが何よりも大切である。

無報酬で八年間

先に東京府美術館建設に百萬圓を寄附し、又百五十萬圓を投じて東京駿河臺に佐藤新興生活館を建て、生活改善運動に乗り出した佐藤慶太郎翁は、福岡縣遠賀郡折尾町の出身で、幼にして貧苦のどん底に人と成つた人である。翁はその地の地主さんの長男として生れたのだが、家庭の事情で翁の父母は若くして家を出る様になり、その後の翁は赤貧洗ふが如き中に、人生の慘苦を骨の髄まで味はされたもので、九つか十の頃から、稻の落穂を拾つたり、櫛の

實を拾つたりして一家の乏しい生計を助けたのであつた。

その翁が、どうして二三百萬圓も公共事業に寄附出来る様な身分になつたか、それには實に翁の忠實な又他と違つた著眼點があつたのである。

數奇な運命に弄ばれた翁は、二十五歳の時九州若松の石炭商山本商店に足掛八年、無報酬で番頭をつとめたのであつた。其の間の勞苦も又人知れぬものがあつたが翁は常に忠實に職務に勉勵し、年三十三にして愈々獨立する事になつた。店主山本氏は翁の八ヶ年の勞苦に酬ゆる爲、出資を申出でたが翁は、「八年間奉行させて頂いたお蔭で、私には石炭の見分け方、賣り込み方、其の他業務一切の經驗を積ませてもらつた。その上に信用ある店での永年の奉行で、自分にも信用が付いて居ます。この經驗と信用の二つは、大きな無形の財産で、その上の贈物を頂くと云ふことは良心が許しません」

と、折角の山本氏の申出を斷つて獨立獨行で社會の荒波に飛び込んだのであ

つた。その後翁の事業は年一年と信用が増し、遂に天下の佐藤慶太郎と躍進したものである。佐藤翁は當時の心境を次の様に語つてゐる。

「開店當時は事務所は表六疊一間きりで古テーブル一つに、六十錢づつの藤椅子を三つ並べ小僧一人と云ふ貧弱なものでしたが、八年間の経験と信用とがものを言つて呉れたのです。経験は一切の取引に一つの過誤も來たしませんでした。信用は店が貧弱であるに係らず三井でも、三菱でも安心して、前金でなく傳票で取引して呉れました。さう云ふ風にして資本金は一文もなくても事業は次第に發展して行つたものです云々」

給料の多寡に従つて働くとか、又碌な仕事もせずいつも不平満々として、年を送り迎へする現代青年にとつて翁の一生は誠に意義深い教訓である。

第一人者たるの心掛

上原勇作元帥は我が陸軍の大恩人で、日本の工兵は元帥の力によつて一新されたと云つてもよい。その工兵監時代等検閲に當つては平素の蘊蓄が自然と發露され、微に入り細に入り互つてなされたものである。

ある年の検閲の際であつた。某工兵隊に赴いて検閲されたが、査閲は大隊長の某少佐にまで及んだ。即ち某少佐に向つて鹿砦の結び方について質問し且つそれを實地に結んで見よと命じられた。こう云ふ事は兵卒の作業なので少佐が面喰つて居ると將軍は「よしわしがやつて見せる」と云つて、自ら鹿砦を結んで見せた。検閲後將兵に向つて訓示を與へられたが、その一節に

「人は一階から二階に上らうとするには誰でも一生懸命に苦心努力するが、二階から三階、三階から四階へと上るにつれて段々馴れて來るに従つて、以前の苦心を忘れ、譯もなく十段も飛び上る積りで徒らに大言壯語する者が多いが、それではいかぬ。一階では一階での最善を盡し、二階では二階での最善を盡す

と云ふ心掛けがなくてはならぬ。少尉は少尉の職を完全に果して隊中第一の少尉たらん事を期し、更に日本での第一の少尉たらんことを期し、又更に世界第一の少尉たらんことを期すべきである。三階、四階……皆然り、どの段階に上つても、その段階に於いては第一人者となり得る自信がなければならぬ。これは則ち階級に昇る者の心掛けである」

と懇々訓戒されたとのことであるが、これは如何なる階級に於てもまことに味ふべき言葉である。商人となるなら商人中の第一人者になり、役人になるなら役人中の第一人者となり、百姓になるなら百姓中の第一人者となる心掛けさへあれば、この人は必ず人類中の選ばれた人物となることが出来るのである。

一粒飲めば腹の減らぬ薬

守田治兵衛氏は貧窮のドン底にある時に、つくづく考へたことは、

「一粒飲めば一日中腹の減らぬ薬が発明出来たら、如何に便利で重寶だらう」と云ふことであつた。これは今から考へたら誠に馬鹿げた話だけれど、守田氏は真剣になつて考へたのだから面白い。そして少し位の資金が出来るや、苦心慘憺その薬の發明に、とりかゝつたのだから一層愉快だ。勿論そんな重寶な薬が出来るとは、守田氏は數年に亘つて、食ふや食はずの貧乏と闘ひ乍ら研究を續けたけれど結局失敗に終つた。

しかし、その作り上げた薬が、現在全國的の賣れ行きを示して居る「守田寶丹」である。目の着け所は突拍子もないことだつたが、努力の結果は無駄にならず、出来上つた寶丹はこれ亦突拍子もなく賣れたのである。

たつた一滴

米國の石油王として世界一の富豪と稱せられるロックフェラーの青年時代、

一粒飲めば腹の減らぬ薬 たつた一滴

彼は、スタンダード石油會社の外装係に就職した。その仕事と云ふのは、石油の一杯詰つた罐の蓋をハンダで密閉することであつた。すべて機械仕掛で、融かしたハンダが一滴づつ落ちて来る様になつて居て、今までその三十九滴のハンダで一罐を密閉するやうに調節されてゐた。

人一倍仕事熱心であつたロックフェラー青年は、その點を新たに研究して見たくなつた。そして實驗して見た。三十七滴では少し不充分であるが三十八滴もあれば完全に密閉出来ることを發見した。以來その調節で仕事を進めて見たが、外装は完全無缺であつた。然かも一年の終りには、約五萬ドル（邦貨約十萬圓）のハンダ代が浮く様になつた。

このことが會社の主腦部に知られ重要されたのは勿論で、後に同社の社長として世界的に活躍する礎地を作つたのであつた。

近 道

才子とか伶俐者とか云はれる人は、常道を迂遠なりとして、好んで捷徑を行きたがるものである。人生には捷徑をせねばならぬ場合も稀にはあるが、一事が萬事、捷徑々々と先きをあせるのは感心したことはない。

何ごとをするにも、無駄は省かねばならぬが、人生の捷徑には無理があり。障害物が多い。よく捷徑は捷徑だが「あゝ仕舞つた橋がない」の失敗を演ずる事がある。古歌にも「武士の矢走の渡し近くとも、急がば廻れ瀬田の長橋」と云ふ通り、迂遠の様に見えても常道を基礎として行くのが人生の著眼點でなければならぬ。

或る所に才太郎と云ふ伶俐者があつた。何事によらず捷徑が好きで、嘗つて一人旅をした處、途中で便所に行きたくなつた。しかし、どこかに座して用を

すますには相當暇がかりり、どうも時間を損すると考へ歩き乍ら用をすます方
法はないものかと考へたが、どうもいゝ思案も浮ばず止むなく路傍の共同便所
に駆け込んだ。

そして用をたし乍らも何とか時間を損しない方法はないものかと思案の末、
思ひついたのは丁度正午前なのを幸ひ、そこで晝飯を済ませば、一石二鳥だと
云ふので、懷中から辨當を取り出して、食べはじめた。所が不幸にしてその便
所内に山蜂が居て、才太郎に近づきざま、チクリと首のあたりを刺したのであ
る。アツと驚くその拍子に辨當を便壺の中へ取ち落して仕舞つた。彼はあつけ
に取られて居たが、忽ち横手を打つて、

「はゝあ、これは捷徑だ」

と云つたと云ふことだが、なるほど捷徑である。辨當は、人間の口を通り胃・
腸を経て、下へ落すのが順序であるのに、口へも入れず直ちに下に落して仕舞

つたのである。がこれでは、何にもならぬ。人間生れると同時に死んだがいゝ
と云ふ理窟も同じことだ。

損して得する

米國のカメラ王ジョージ・イーストマンはもと一保險會社の會計係りであつ
た。道樂の寫眞器から思ひついて、乾板の發明に成功し、遂に一八八〇年十月、
ヘンリー・ストロングと云ふ人の資金援助を得て、自ら製造工場を作り「イー
ストマン式乾板」と銘打つて市場に賣り出した處、便利で安いと云ふので文字
通り注文殺到、創業一ヶ月にして四千弗以上の賣上げを見ると云ふ繁昌振りを
示した。

しかるに翌年春になると、注文がぱつたり止まり、作つた乾板は一つも賣れ
ない状態になつたので、どうしたのだらうと懸念してゐると、或る取引先が

損して得する

の商人が、

「あの乾板は一冬越したら、完く駄目になつてしまつた。あんなインチキなものをつかまされて、えらい迷惑だ。この頃は、お客様から叱言や苦情ばかり持ち込まれて困り抜いて居るんだ。一體どうして呉れるんだ」とどなり込んで来た。

イーストマンは、「さては」と感じ自分でも試して見ると、正しくその通りなので、「これはいかん、こんな不完全なものを賣つては信用にかゝわる。人間は信用が大切だ」

と彼は早速次の様な印刷物を作つて全國の取引先きに配つた。

「不完全な製品の爲に、多大の御迷惑を相かけ、何とも申譯御座いません。残品がありましたら、原價で御引取り致しますから、商品全部御返送願ひます。思ふ所あつて一旦工場は閉鎖致しますが、いづれ完全なものを作つて再

び御目見え致す所存で御座います故、その節は又是非倍舊の御援助を御願ひ申上げます」

そして彼は、返されて来た残品を片つ端から粉碎して棄て、仕舞ひ、工場を閉鎖して、漂然と姿を消した。彼は英國に渡つて、ニユーカッスル寫眞研究所の研究生となつたのである。かくて研鑽を積むこと半年、つひに何年経つても能力の變らぬ乾板の發明に成功したので、再び米國に歸り工場を再興して先の御得意に事の次第を申し送つた處、先に彼が残品を引取つて粉碎したことを知つてゐるので、各取引先では、今回のものは必ず彼の聲明通り完全なものに違ひないと云ふので、すぐ取引きを再開して呉れた。かくて彼は再び非常な繁盛を獲得し、同時に又イーストマン・ベスト・コダックを發明したりして、今や全米はちろか、カメラ王として全世界を征服し、今日の大成をなしたのである。

虚 心 坦 懷

一九六

昔、或る所に金持ちのユダヤ人があつた。精神上的の苦悶を醫したいと思つて精神學の博士を訪ひ相談した。すると博士は硝子窓の所に彼を伴ひ行き

「ここから表を御覽なさい。何が見えるかね」と尋ねた。

「澤山の通行人が見えます」

次に博士は彼を鏡の前に伴ひ行き

「この鏡を御覽なさい。何が見えるかね」

「私自身の姿が見えます」と彼は何のことだか不可解の態度で答へた。

「そこぢや」

と博士は笑ひ乍ら説明した。

「同じ硝子であり乍ら、窓からは世間の人達がよく見える。が鏡に向へば自分

自身しか見えない。これは鏡の硝子には裏に少しばかりの水銀が貼つてあるからです。あなたも自身、金銀を持つてゐるばかりに自分自身のことしか考へられないのだ。そこから身勝手な苦悶が生ずるのですから、その依つて生ずる根本を清めるんですね。」

金持ちは豁然と悟るところがあつた。

又或る所に酒嫌ひな老人があつた。或る宴會の席上、人々は酒を飲み合つて喜んで居るのに老人は欠伸を噛み殺して煙草ばかり喫つて誠に退屈そうだったので、主人が見かねて、奥から南京古染付の壺を持ち出し、

「お老人、どうぞこれなりとお摘み下さい」

と云つた。壺の中には大粒の金米糖が入れてあつたのである。老人は

「これは結構なもの」

と早速壺へ手を入れ、さて手を抜こうとした處、固く手頸が詰つてどうして